

---

# 神宿ル劍

名無しだけど権兵衛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神宿ル剣

### 【Nコード】

N47550

### 【作者名】

名無しだけど権兵衛

### 【あらすじ】

アヤシイ道化に導かれ、少年は異世界に降り立つ。非日常に感動する間もなく彼に降りかかる、王女失踪だのクーデターだの逃走劇その他諸々。その最中に見え隠れする【神器】の存在とは？  
作者の処女作。暇潰しの最終手段にどうぞ。

理解不能な光景を目の当たりにした時、人間は一切の反応を奪われるものらしい。思考停止した脳の片隅で、神崎 峻はぼんやりとそんなことを考えた。といっても彼はもともと表情が乏しい方なので、その反応が万人に当てはまるかどうかは微妙なところだ。自分でそう考えてちよつと寂しくなった。が、およそ凹んでいるとは思えない表情を保ったまま、峻はぼんやりと目の前のソレを観察した。

彼の視線の先には、

『ジャツジャーン!!』

踊り狂う変態がいた。

端々にフリルがついた、赤と青と白のマーブル模様の衣装。先が枝分かれした間抜けなとんがり帽子。白粉の上に、涙のマークと口裂け女ばりのメイク。お手玉や玉乗りはしておらず、びよーんびよーんとその辺を跳ねまわっている。  
要するに道化である。

どこからどう見ても道化なのだが、サーカスやお祭り以外でこんな恰好をしてるやつがいたら、明らかにまともな人間じゃない。

イコール、変態。

「……最近疲れてんのかな、俺」

『ちよつと待てオラアアアア！！』

そうかだからこんな気色悪い夢見るのか。こめかみを押さえる嵯の独白に、変態が全力でツッコんだ。

『何で勝手に自己完結しちゃったのアンタ！？』『こいつ誰？』と  
かってリアクションないの！？』

「ない。あんたは変態、それで十分。それ以上あんたのことなんか知りたくない」

『変態って言うなゴルアアアアア！！』

目の前の変態は手足を振り回しながら喚いた。が、嵯は己の頬をつねりながら「どーやったら目エ覚めんだっけ」と完全に無視して

いる。

しばらくすると変態が『無視すんなオラアアアア』とか騒ぎだしたので、ほんのちょびつとだけ譲歩してやることにする。

「じゃあ何か、変態じゃないとでも？」

『あつたばーよ！ まあ見ての通りだけどネ！』

「見ての通り……………イヤ、やっぱり変態じゃん」

『だから違つって言うてんだろーがアアアアア！ 普通にどっからどー見ても道化でしょーがボケエ！！』

やっぱりうるさい。峻は煩わしそうにガリガリと頭をかいた。

容姿ゆえか性格ゆえか、彼は何かとトラブルに巻き込まれることが多い。それでなくても多感な思春期（こんなんでも）、眠りの中でくらい平穏でありたいと願うことは無理からぬことだろう。

その平穏をかき乱すこの「自称」道化は、彼にとって間違いなく邪魔な存在であつて

『アレえ？ もしかして、まだ夢だと思つてるウ？』

……………は？

でもこんな奴が夢に出てくるって、俺もしかして情緒不安定？

と勝手に鬱になっていた峻は、「自称」道化の間抜けな声に思わず固まった。

「……………どついう意味？ それ」

『言葉どおりの意味さア。ここは現実、アンタはちゃんとしてきてる』

峻はニタニタと笑う「自称」道化を見た。  
顔全体を覆う気色悪いメイクのせいで、表情が読めない。

「……………じゃあ何か、このアホみたいな不可視空間が現実リアルだったのか？ ふざけんなボケ」

『何さア、見た目の割に頭が固』

「黙れカス。俺の何が分かるかこのド変態が」

『……………えーん』

「泣くなキモい」

「自称」道化を黙らせると、峻は2人を取り囲む空間を見渡した。  
何も無い。

真っ暗だとかそういう意味ではない。片頭痛で視覚障害になった

かのように、何も認識できないのだ。

不思議なことに、「自称　もう長いから普通に「道化」でいいや  
道化と峻自身は認識できているが。よく見たら昼寝する前の服  
そのままだった。

足元を　といつても中空と地面との見分けすらつかないので、  
それらしい場所を　触ってみる。

ガラス板を押したときのような硬い抵抗に阻まれたが、何の感触  
もしなかった。パントマイムの気分だ。

……………何このトンデモ空間？

あまりの非常識っぷりに、峻は思わず吐き気を覚えた。

「なああんだ……………あれ？」

『……………ぐすっ』

道化に何か訊いてみようと思ったが、肝心の当人は未だに凹んで  
いた。

野郎（しかも変態）が体操座りで泣いてる姿を見ても気持ち悪い  
だけなんだが、と思ったのは内緒である。

とりあえず、その頭を踏みつけた。

『ぎゃふッ!?!?』

「ああ？　そこは『そ　ぶ』とか何とかだろ」

『何故にイマ　ンブレイカー！？』

「イヤ、何となく」

『何となくでネタ振っちゃった！？』

「ガタガタうるせーな、あんたは黙って俺の靴でも舐めてりゃいいんだよ」

『今度は女王様！？』

「あ、そっぴゃ靴履いてないじゃん俺」

『ツッコむトコが違うー！』

「……んんっ……っもー！　足を、どけなさいッ……コンチクショ  
ー……」

やっとの思いで峻の足から這い出た道化は、ぜいぜいと肩で息をしながら峻を睨みつけた。

『……何で、もう……アタシあねえ、アンタに、遊ばれる、為にッ  
……こんな、とこまで、来たんじゃ……ない、だよ』

「あんたが俺を拉致ったんじゃねーかオイ。……っーか大丈夫か？  
息切れすぎだろ」

『ダイジョーブ……に、決まって、でしょー……がア！』

「そこで意地を張る意味がわからん」

すー、は、すー、は ……

結局深呼吸でようやく息を整えた道化は、えーコホン、とわざとらしい咳ばらいをした。

さすがにこれ以上おちよくると話が進まな …… というよりコイツの相手が面倒くさいので、峻は暫く黙って話を聞くことにした。

何かメタ発言的なものが混ざっていた気がするが、気にしない。

『コホン、え …… でわ、ワタクシが何故リヨウちゃんをここに連れ込んだかと申しますとオ』

背筋がゾツとするようなキモい表現がいくつかあった気がするが、気にしない。

『【新たな出会いが見つかるカモ？ ラッキースケベもバッチこい！ ドキドキ 異世界冒険ツアー！】 に、リヨウちゃんが見事ご当選したからDEATH』

気色悪い電波発言が垂れ流されてる気がするが、気に

「するわアアアアアアアアアアアア！！」

峻のドロップキックが、道化の顔にめり込んだ。

『ぎゃふうッ！』

「ああもう気持ち悪い！ 何故にちゃん付け！？ ホモか！？  
ホモなのかあんた！？ ていうか連れ込むとかいう表現ヤメテ！！  
掘られるのヤだから俺！！ イヤ掘るのもヤだけでも！！」

『……イヤ……アタシも……ホモじゃ、ねえし……』

「つーかあの電波ナニ！？ 何なのアレ！？ 新たな出会いとか明  
らかに胡散臭エシ！！ ラッキースケベとかノーサンキューだし！  
！ ていうか異世界とかどう考えても電波じゃん！！ どっから受  
信した！？ それか！？ その悪趣味な帽子がアンテナかアアア  
ア！？」

『……ち、違ッ……』

「あとDEATH とかキモい！」

『……今更……言われて、も』

小説の尺？ 知るかそんなもん。

「で 【異世界冒険ツアー】？」

『……ハイ、ソウデス』

結局気絶してしまった道化を叩き起こし（蹴飛ばした）、峻は道化を尋問した。

何故か正座させて。

正座で涙目の道化と、上から目線で問い詰める峻。なかなかシユールな光景である。

「とりあえず……なんでこんなこと言いだした？」

『イヤあ……現代社会は何かと疲れるっしょ？ こーいうイベントで気分転換になったらいいんじゃない？ ……みたいな』

「で、あの気色悪いセリフ？ いい加減にしるよこのド変態」

『……「めんなさい」』

変態呼ばわりされてもノーリアクションの道化。そんなに峻が怖い  
か。

「しかしまた 異世界、ねえ」

一方の峻はと言えば、道化の言葉の真偽をはかりかねていた。  
特定の宗教もオカルトな趣味も持たない峻にしてみれば、『異世  
界』など妄想にもほどがあるのだが、

「このトンデモ空間がある以上、なあ……」

現実世界において、認識不可能な空間というものは 密閉空間  
とか失明とか視界の外とかは例外として 存在しない。

存在しないはずの空間が存在している以上、異世界も認めざるを  
えないのか。

実は夢オチという線も捨てきれないが、道化を蹴飛ばした感触は  
ちゃんとあった。不幸なことに。

不愉快な話だが、やはり異世界

「だが断る」

『ええー!?!』

「当たり前だバカモノ。誰がそんなアブナイ企画に自ら飛び込むか

つての、おととい来やがれこの変態」

『え、ちよっ……ま、待った！ ストップ！ ていうかドコ行こうとしてるの！？』

道化に背を向けて歩き出す峻の袖に、道化はあわててすがりついた。が、峻は構わずに道化をずると引きずりながら歩き続ける。まさに傍若無人。他人の都合なんてまるで考えちゃいない。

ちなみに道化の疑問に答えを与えるとすれば、彼は「歩きまわってりゃそのうちどっかに出んだろ」と考えている。ええ、そんな男ですこいつは。

『ちよ……勿体ないさア！ こんな企画メッタに無いよ！ 10年に1度レベルの超企画だよ！？』

「知らん。そんなアホ企画よりも身の安全をとる」

『ち……ちくしょう！ これだから枯れてるヤツは！ 何言っても聞きゃアしないんだから！！』

「聞こえませんかあ？ 電波道化ふぜいが」

『ムキイーツ！！』

「猿か」

馬耳東風。柳に風。のれんに腕押し。  
自分のペースを崩さない峻の態度に業を煮やした道化は、最後の手段に出た。

『……………いーんかなア？ アタシにそーんな態度とっちゃって』

「は？」

『アンタをここに連れてきたのは誰だっけえ？』

「……………あんた」

『もーちよつと身の振り方考えてくれないと アタシも、ねえ？』

峻をここに連れてきたのは道化であり、彼自身はこの空間から出る方法を知らない。ゆえに、ここから出るには目の前の道化の許可が必要不可欠。

早い話、脅しである。汚い、さすが道化汚い。

「……………元の場所に戻せ」

『ぐわっ！ ちよつ、首締まっ……………』

「いいから戻せ」

……………が、峻には通用しなかった。

道化の首を締めあげ、逆に脅しているのである。立場逆転してるじゃん。

『いや、ちよっ……ホラ、企画つつつてもゲームみたいなもんっすよ！別に命に関わるようなこっちゃんないですっつて！だから……ねえ？ていうか放してマジで首締まるって！！』

もはや勢い余って縊<sup>く</sup>り殺しかねない峻<sup>く</sup>に対し、それでも交渉を続ける道化。

状況の割にけっこつ余裕である。

「ゲームつつつてどーせ1泊2日とかじゃねえんだろ。却下だ却下」

『な……何よう！そんな忙しい生活でもないでしょーが！！』

「いや、明らかにそれとこれとは関係な」

頑なな態度を崩さない峻の脳裏に、ふと家族の様子が浮かんだ。

自分が突然いなくなったら、彼らはどうするだろう？道化の言葉を信用するのなら、既に彼らの目の前からいなくなっていることになるが。

こんな傍若無人な男だけど、きっと心配してくれるのだろう。身内から見てもお人好しな連中だから。

でも、それを期待する権利はない。  
そう思うと、峻は酷い無気力感に襲われた。

「乗るよ。道化」

そう言っつて、道化の首にかけていた手を離す。射殺さんばかりの殺意から突然解放されて、道化は『ぐえっ』と情けない声を上げた。

『ふえ？』

「どーせ『乗る』って言わなきゃ帰してくれねーんだろ？ 折角だから、暇つぶし代わりに参加してやらア」

『マジで！？』

「いや、マジでも何もあんたがしつこく言ったんじゃねーか」

『やったー！ よかったホントよかった！！ もう感動で涙でそう』

「何だそのテンション。……終わったら、ちゃんと元の所に帰せよ」

『あーいよ！ そんじゃ1名様ごあんなーい！』

妙にテンションの高い道化を見て、やっぱやめようかなーと峻は

思っのだった。

「……………で、何これ」

3分後、峻の前には円形の幾何学模様があった。

『何って…………魔法陣に決まってんじゃない』

「何その一般常識だろ的なセリフ？ えっ俺変なこと言った？」

不満げな峻をよそに、道化はどこからか取り出したチヨークで三角形やら四画形やらを器用に組み合わせながら円陣を描いていく。

よく見ると、円陣の端々にルーン文字らしきものも書かれている。…………いや、これはゲール語ですとか言われても違いなんか分かんないけど。

『まあアレさ、雰囲気は大事さア』

「ふーん……」

峻が適当な相槌を返しているうちに、魔法陣が完成した。中央だけ模様が除けられている。

道化は次に、またどこからか葉っぱやら硫黄やらを取り出し、魔法陣の周りに置いていった。

「今度は何だソレ。……つーかどっから出した？」

『何言ってるの！ 魔法の儀式なんだから触媒は必要っしょ』

「いやあんたさっき雰囲気って」

『それはそれ、これはこれ』

「えっちよい待ておい、これアレか、丸め込まれてねーか俺」

『じゃ、かんせーい！ てなワケで真ん中に立ってー』

「変態にほだされた！？ 何このどうしようもない屈辱感!？」

どうしようもこれもしかしてホントに俺がおかしいの、と勝手に鬱になりながら、峻は円陣の中心に立った。

道化が片手を揚げた途端、魔法陣がまばゆい光を放ち

そのまま、光が消えた。

(……………あれ?)

待て待て落ち着け、きっとこれから何か起こるんだ、と峻は心の中で身構える。

1分。

2分。

……………何も起こらない。

「……………おいちよつと待て道化、こんだけ長い前フリしといて」

そこで峻は、ある異変に気付いた。

どうして道化の眼は、あんなにギラついているんだろっ? どうして道化の顔は、あんなにニヤついているんだろっ? ともと気色悪いメイクしてるが。も

どうして道化の手に、金槌が握られているんだろっ?

『死ねエ!!--!』

「んがっ!!--?」

黒光りするヘッドが、渾身の力を以て峻の脳天に直撃した。不意打ちをまともに食らった峻の軀が、なすすべもなく崩れ落ちる。

『 1名様、ごあんない 』

昏倒した峻を見下ろして、道化が妖しく笑った。

「……で？ どーすんスカ、この子」

「どう、ったってなあ……」

男2人の話し声がして、峻の意識は覚醒した。

あちこちの関節が軋む。軀がひどく重い。呼吸さえ煩わしい。感触からしてベッドに寝かされているようだが、硬くて居心地が悪い。

「どつたつてなーもクソもないでしょーが。団長が拾ってきたん  
スよ」

「……お前、たまに言葉キツイよな」

起きたところで事態が変わるでもなさそうなので、峻は狸寝入りを決め込んだ。……本気で寝ようとしていたが。

が、それを遮るように、男たちの言葉が降りかかった。

「しかしやだなーこの真っ白い髪。まるで氷の悪魔ヘルベスじゃないスカ」

「何だ、お前そんなモン信じてたのか？」

「昔々の話っス。風邪こじらせて死に掛けたことがあって、トラウマなんスよ」

どこに逃げても、自分は世界に受け入れて貰えないらしい。  
男たちに気づかれないように、峻は小さく嗤った。

神宿ル剣：02

原因は『隔世遺伝』らしい。

母方のほうらしいが、詳しいことは知らない。メンデルの法則が  
どうとかなんて聞かされてもよく分からないし、そのためだけに医  
学知識を学ぶ気にもなれない。

自分の容姿の原因を知ったところで不毛だ。

母が俺を捨てた事実が、一片でも変わるわけではないのだし

「ところでキミ、いつまで寝たフリしてるんスか？」

2人の男の片割れ 若い方の声が、峻の思考を粉碎した。

まさかと思い峻はしばらく聞こえないフリをしていたが、どうやら相手はそれすら見抜いているらしい。峻は観念して、ゆっくりと起き上った。

「……寝たフリには自信あったんですけど」

「あんま自慢にならないっすね、それ」

「すげえなお前、何でコイツが起きてるって分かったんだ？」

「団長何スかその自分は分かんなかった的なセリフ!? 本当に第一線で戦ってるんスか!？」

三者揃って、どこかネジのゆるい連中である。

あまり似てない2人組だな、と峻は思った。漫才コンビみたいな組み合わせである。

峻に声をかけてきたのは、30歳前後の若い男だった。ロープのようなゆったりした服装で、長めの黒髪は後ろで束ねている。この世界には無いのだろうか、眼鏡が似合いそうな理知的な雰囲気を漂わせていた。

もう1人は壮年だった。筋骨隆々の大男で、着ているシャツが窮屈そうである。使い込まれた様子の簡素な皮鎧、顔に刻まれた大きな傷、身に纏う雰囲気すべてが、『戦士』という言葉を連想させ

る。

「面倒な前置きを並べても仕方無いっスね。単刀直入に訊きます」

若い方の男が、コホンと咳払いをした。冗談が通じそうな雰囲気ではない。

「キミは何者っスか？」

異世界から来ました、とか言ったら確実に精神病院送りだろう。

……どうでもいいがこの世界に精神病院ってあんのかな、と峻は場違いなことを考えた。

「記憶喪失う？」

ということにしました。

「たぶん。つーかここどこですか？」

「その割にえらく落ち着いてますねキミ……」

テンプレってホント便利だよな、と峻は心の中で誰にともなく感心した。対応を想定し易い。

どちらにせよ、この世界の常識を一切持たないのは事実である。それが失われたか、初めから知らないかの違いでしかない。

「記憶喪失ってなあ、そんなホイホイなるもんなのか？」

「ありえない事じゃあないっスね。頭に強いショックを受けると起こるらしいっス」

むろん可能性は低い。それほど強烈なショックを受けながら放置していたら間違いなく死ぬ。少なくとも、金槌で殴られる程度ではないのだから。

そういえば、道化は何をしているのだろう？ 放置するつもりか。

「……まあ、ショックを与えなおせば記憶が戻るとも言われていますけど」

「ほおそーかい。じゃ一発試してみるか？」

「全力で遠慮します！」

巨漢の方が拳をボキボキと鳴らし始めたので、峻はあわてて否定した。ホントに記憶喪失になるのは勘弁したい。

「そうか？ 別に構わねーが………で、記憶喪失だつて？」

「そのセリフさっきも言いましたよね」

「うるせえな！ 話が逸れたから戻そうと思ったんだよ！」

「脱線し始めたのは団長っスよね」

「ああもうホントムカつくなお前らアアア！！」

こんちくしょう！ と巨漢は大声で喚いた。宥める人間はいない。

「まあ遊ぶのはこれくらいにして……本当に何も覚えてないんスか？  
せめて名前くらい」

「……えーつと……」

なに、どじするか

名前は都合よく覚えてるが、他は全て忘れてる。そんな不自然極まりない話が容易に信じられるだろうか？　ここで妙な疑いを持たれるのは得策ではない。

が、ここで知らないフリをしたばかりに面白い名前をつけられる……というのも困る。

「……あ、覚えてます。確か　リヨウって名前だったと」

ぶつちやけ面倒臭え。　　峻は葛藤を黙殺した。

「リヨウ……っスか？　聞かない名前っスねえ」

「まあいいんじゃないか？　名前だけでも覚えてたのはラッキーだろ」

巨漢の方はすでに興味がなさそうだが、若い方はやはり疑問を抱いたようだ。偽名の方がよかっただろうか。

「　さて、俺は質問に答えましたけど。あんた方は誰で、ここはどこなんですか？」

峻は若い方を挑むように一瞥した。男も負けじと睨み返す。数秒ほど睨み合っていたが、軍配は峻に上がった。

「まあ、いいでしょう。こちらにも名乗るのが礼儀ですしね。  
ここはベルキュラス王国北西カーチス領に拠点を構える『ヴァル  
ク傭兵団』っす。

「こちらは団長のカルドク、自分は参謀のラグといいます」

「傭兵団……」

「お前ら何今の睨み合い、さあ自分でもよく分かんないっす、と2  
人は他愛もない掛け合いをしていたが、峻はほとんど聞き流してい  
た。

「いける。これはいける！」

「えーと……カルドクさんとラグさん？ だっけ」

「何スか？」

「俺を傭兵団に入れてください！」

「……………は？」

「ベッドの上で土下座する峻を見て、2人は揃ってポカンとした。  
大丈夫かこのガキ、という眼をしている。

「この通り、行くところが無いんです！ 雑用でも何でもしますか  
ら、ここで働かせて下さい……！」

「いや、それは分かってるっすけど……」

渋るラグに、峻は必死で食い下がった。

サバイバル知識が無い彼にとつて、ここから放り出されることは即ち死を意味する。それだけは何としても避けねばならない。異郷の地で餓死とか嫌すぎる。

その執念に気圧されたのか、2人は彼に背を向け、小声で相談を始めた。

「……どうします？」

「どうするも何も……まさかとは思うが、密偵だったら入れるわけにやいかねーぞ。お上のガサ入れは勘弁してえ」

「その心配はないっすね。記憶喪失なんてウソ、間抜けにも程があるっす」

「そういう話は本人に聞こえないように話すモンじゃないんすか！？」

筒抜けな会話を続ける2人に、峻は思わず突っ込んだ。

「そっすねえ………キミ、掃除洗濯はできますか？」

「まあ………多少は」

洗濯板は流石に使ったことがないが、大体の使い方は知っている。  
あとは経験で何とかなるだろう。

「じゃあ決まりっすね。今日は何にもできないでしょーから、ひと  
まず休んで結構っす。仕事は明日からお願ひしますね」

「お……おい、即決か!？」

「あざーっす!!!」

「イヤ、お前ももつと驚けよ!」

「仕事は掃除洗濯その他雑用、意欲があるなら『実務』にも同伴し  
て貰います。

飯と寝床、それからキミには服もこちら持ちで支給しますんで、  
当分はそれが報酬代わりっす。まあ、1、2ヶ月も経てばその他に  
給金も出しますよ」

「無視か!？　なあ無視か!？　お前らホント何なんだよちくしよ  
おおお!!!」

カルドクの怒声が室内に響いた。宥める人間はいない。

それから、1ヶ月が経つ。

「よっこいせ……と」

峻はモップを床に下ろし、磨き上げた廊下を見渡した。  
うむ、我ながら中々の出来。掃除もだいぶ板についた。

「うし、掃除終わり！ 洗濯も団員の帰還待ち……あとは武器庫の  
点検だっけ」

事件も波乱も無く、フラグらしいフラグも無く、雑用に追われる  
うちに1ヶ月が飛ぶように過ぎた。  
何というか、平和である。

……のは、構わないのだが。

「……あの変態め」

道化から、一向に連絡がこない。

本人も「ゲーム」と称していたのだから、ナビゲーター的な役割を務めてくれてもいいはずだけどな、と峻は思う。まあ、脳内にアレの音が充満したら気持ち悪いことこの上ないが。

そもそも、奴には何か目的があったはずである。

なればこそ道化はああして彼を拉致し、苦勞して焚きつけこの異郷に送り込んだのである。しかし 偶然傭兵団に拾われたからいいものの 峻に万一のことがあれば、その目的の達成は危うくなる。それを避けるためには、少なからず彼を誘導する必要があるはず。

それがなぜ、何の音沙汰もない ?

「うーす、リョウ！」

「おわあああ！！ って痛ッ！？」

背後から急に肩を叩かれ、峻は思わず飛び上がった。ついでに足元のモップを蹴飛ばした。

「ひでーなあ、そんなに驚くことないだろ？」

「イヤ、その……すんません」

振り返ると、茶髪の青年が苦笑していた。

ヴァルク傭兵団の一員、ジャン。

歳を訊いたところ峻とそれほど変わらないらしいが、短剣の腕と身軽さを買われ、団では重宝されている。新入りの峻にも親切に接する気さくな青年で、傭兵団のムードメーカー的存在である。

「何だ、もう帰ってきたんだな」

「んー、今日のはハズレ。ミツラトの西の森で『ゴーレム』が出るって話だったんだけど、ガセだったみたいだ」

「何か多いな、そういつの」

「それでもねーよ、ここ一ヶ月くらいですごく増えたんじゃないかな？」

「ふうん……」

「てなもんで、リヨウにも仕事が増えてくることになったんだ」

「へ？」

初耳である。峻も多少武術の心得はあるが、他の団員のような専門職のレベルではない。ラグも当面のところ投入の予定はないと言っているなかったか？

「豪商の護衛をやるんだってよ。久々の団員総出だ、リヨウも戦え

るんだろ？」

「まあ……護身術程度にはな」

「じゃ、依頼は明後日だから、今のうちに武器を用意しとけよ。……団員たちが自分用の確保しちやってるから、目ぼしいのは無いかもしれねーな」

「そっか。どのみち今から武器庫の点検をするところだったから、合わせて選んどくわ」

「あ、じゃあオレも手伝うよ」

「おー、悪い」

峻は足元のモップを拾い上げ、ジャンと並んで歩きだした。

明後日は初陣。

素直に喜ぶ気になれないのは、やはり俺も人の子だろうか。

「ん？ 今何か言ったか？」

「んにゃ、何でも」

馬鹿馬鹿しい。

隣のジャンに気付かれないように、  
峻は小さく嗤った。

ヴァルク傭兵団には、『己の得物は己で管理すべし』という習慣がある。

質のいい武器は各自で購入し、手入れも自分でせよということであり、武器庫にある武器は得物が壊れたときに新品を買い直すまでの代用品でしかない。したがって管理もぞんざいであり、その殆どが錆びていたり刃が欠けていたりと使い物にならない。

だから、ろくに汚れていない『それ』は異様だった。

「……………何だこれ」

もはや鋸状になり打ち捨てられた剣の脇に、『それ』は落ちていた。

形は日本刀に近い。1m弱の刃は周囲の剣と比べて明らかに細く、緩やかな反りがある。黒漆が塗られた鞘には装飾が殆どなく、鈍い光沢を放つ護拳も簡素な形状である。

サーベルだ。

峻はサーベルの鞘を掴んだ。ずしりとした重みが手にかかるが、鉄の塊と思えばかなり軽い。

何故、こんなものが？

「おーい、いいの見つかったかー？」

「え？ あ、えーと……」

ジャンの呼び声に、峻ははっと我に返った。

「あれ、何だこれ？」

「さあ……よく分かんね」

ジャンは怪訝そうな顔をしてサーベルを覗き込み、手元の在庫リストに目を落とした。……峻はこの世界の文字が読めないので、点検は彼に任せている。

峻が刃を確認しようと柄に手をかけた瞬間、

眩い光が、彼を飲み込んだ。

(は ！？)

見つけた………

「うーん、在庫リストには載ってないなあ……」

ジャンの唸る声が頭から降りかかるようにして、峻の意識は現実  
に引き戻された。

「……………何だ今の」

「ん？　どうかしたか？」

「いや、今何か……………まあいいや」

彼には今の光が見えなかったらしい。不思議そうな顔をされたの  
で、峻はあわてて話を逸らした。

「で、えーと、リストにはないのか？」

「ああ。こんな細い剣、あっても誰も使わないと思うけどなあ」

確かに峻はこの1ヶ月、刀を扱う人間を見ていない。

片刃の剣なら何度かあるが、それでもこのサーベルの2倍くらい  
の太さがある。そもそも刀自体がひどく脆いため、あまり好まれな  
い。いくら切れ味がいいと言えども、装備の耐久性を重視する傭兵  
にとって、大した魅力はないのである。

だとすれば、これは　？

「まあこれでもいいんじゃない？ どーせリョウ前線出ないし」

「その言い草酷くない!？」

「大丈夫だって、たかが護衛任務だぜ？ 護身用の武器があれば十分だよ」

「いや、そりゃそーですが……」

「じゃあ団長のお下がり使う？ 今度新調するらしいよ」

「この剣使わせていただきます」

とんでもないことを言われたので諦めた。自分の身長ほどもある剣はとても扱えない、というかどうやって振り回してんだあの人。

「っし、休憩するぞー」

団長カルドクの野太い声があたりに響き渡り、峻はやれやれと僅かな解放感に包まれた。

今回の任務は、マルク商会会長ラゴータ・マルクをカーチス領首都ムルギキに送り届けることだ。

護衛対象とその取り巻きを馬車に押し込み、その周囲を団員が取り囲んで目的地まで移動する。峻自身は戦力外なので、もっぱら連絡役である。

「すみません、これから口口の森に入るんで、手前で少し休憩します」

御者に伝え馬車を停めてもらうと、峻は車内の人間に向けてややぶっきらぼうに言った。

「何じゃ、またか？ 先程も休憩したばかりであろう」

でっぷり肥ったメタボ腹の商人が退屈そうに言った。

もう一刻近く経ってます、っ！か最初に休憩ポイントを説明しただろうが。言おうかちょっとだけ迷った。

「……集中力切れるといけませんから。」

森さえ抜ければその先は治安がいいんで、あとは一気に行けます  
「よ」

「そうか？ まあ、報酬ぶんきっちり守ってくればよいがのう」

「……………ども」

軽く会釈をして、峻は馬車の扉を閉めた。

「あ、お疲れさんっす」

少し離れたところで、ラグが団員たちに指示を飛ばしていた。マルクにはああ言ったが、裏を返せばこの口口の森が最後の難所であり、ここで慎重になるのは妥当な判断だと言っている。

「……………お疲れっす」

「あら、意外と元気っすね。そろそろへばってる頃だと思ったんすけど」

「そりゃ、周りに皆いますし。俺は刀一本担いで歩いてただけですから」

峻は背負ったサーベルをぽんぽんと叩いた。

いろいろ触ってみたが、あれから刀は光の一片も発することはなかった。

触ったどころか、柄を握って引き抜いたり振り回したり「卍！」と叫んだりと、いろいろ試してみたのだが、うんともすんとも言わない。

薄気味悪い話だが、峻はあまり気にしないようにしている。

冷静に考えれば、アレが現実かどうかは定かではない。もしかしたら現実に起こったのかも知れないし、ただの眼の錯覚だったのかも知れない。あるいはこの刀とは無関係だったのかも知れない。魔術的な知識も無いのに、いちいち考えるだけ無駄な話である。

……ぶっちゃけ面倒臭かったただけなのだが。

「まあ、総出っスからね。いやー、向こうさんの払いが良くてよかつたっス」

「……よく言うよこの人」

「ん？」

「今回の護送料、えらいぼったくつたらしいですね」

具体的には通常料金の2・5倍らしい。と、ジャンから聞いた。峻が軽く指摘すると、ラグはあからさまに動揺した。参謀がそんなんでいいのか。

「な……ななな何のことっスかねえ！？　じじ自分はちゃんときき規定のりりりり料金プランに則って」

「……それ、マルクさんの顔見て言えるんすか？」

「ぐ……む、向こうさんが全員を指定してくるからいけないんす！ たかが1つの依頼に馬鹿正直に全員回してたら商売あがったりなんすよ！」

自意識過剰の成金からちょーっと多めにいただいて何が悪いんすか！？」

「まあ、ぼつたくりを正当化できない程度には」

「ええいちくしょう！ 口ばかり達者なんすから！」

不意に、ラグは明後日の方向を指さした。  
誤魔化して逃げるにしても、あまりにも古典的な手段である。峻は適当に付き合おうとして

「ああーっ！！ あれは何 ……っすか……？」

口口の森の方で、黒い煙が上がっていた。

口口の森は凶悪な魔物が棲みついていることで有名で、その影にまぎれて道行く人に狼藉を働く野盗も多い。したがって、地元住民でこの辺りに寄り付く人は殆どおらず、旅人も大抵はここを迂回する。わざわざ火を焚くような事態に至る者は少ない。

第一、黒い煙は不完全燃焼の証である。

「……リヨウくん、団長を呼んで」

「俺、ちょっと見てきます！」

「ってうおーい！！ 一人で行ってどうするんスカ！？

ああもう！ 誰か、ちょっと団長呼んできて！！」

ある意味、期待はずれである。

「……そりゃ、何かあるかもとは思いましたが」

ホントに何かあってもさあ……と峻はため息をついた。

黒い煙の正体 燃えているのは、黒い馬車だった。マルクのそれよりも幾分高級である。

一部に火がついているだけのようで、遠目からみた様子ほど被害

は大きくないらしい。が、既に車が壊れ、馬も事切れているのか伏したまま動かない。周囲で戦っている2人の騎士も満身創痍だ。その辺りに転がっている鎧を着た死体を見るに、もともと6、7人程度しかいなかったらしい。

襲っている側は15人ほどの山賊たちだ。数に任せて襲撃したらしく、こちらは大した被害が出ていない。

(……さて、どうするか)

距離にして約30m。が、手許にあるのは2本のナイフとサーベルのみである。ついでに言うと1対15。

戦力的には、団長たちの到着を待つのが確実。しかし、ここで手をこまねいていればあの2人はもたないし、馬車内に居るであろう誰かも危険にさらされる。

ええい、ままよ!

峻は腹をくくった。

ぎりぎりまで接近し、なけなしのナイフ2本を適当な2人に投げつけ、急いでサーベルに持ち替える。放たれた2本は何とか命中し、不意打ちを食らった2人はぎゃあと野太い悲鳴を上げた。

何事かと振り返った1人の喉笛を裂き、隣の男の胸に一撃。背後からきた斧を受け止め、素早く飛びはずさって距離をとった。

「誰だデメエ!？」

1対13。こちら損傷なし、向こうは2人が肩を負傷。  
……出だしは悪くない。

冷静に彼我の戦力差を分析しながらも、峻は立ち止まらない。困  
まれたら終わりである。

ただし、

「無視すんじゃないエクソガキがアアア!!!」

はたから見れば相手ガン無視で走り回ってるように見えるので、  
相手の神経を逆撫でするばかりである。……性格に由来するのも  
しれないが。

さらに言えば、立ち止まった瞬間に取り囲まれて<sup>なぶ</sup>罅り殺しになる  
ため、一向に攻撃ができない。走り回っているせいで体力を消耗す  
るため、ジリ貧の戦いである。

「おい、そっち回り込め!」

「げ」

正面に現れた山賊の1人に小手を決め、怯んだところを峰で殴り  
倒す。続いてもう1人の股間を蹴り飛ばし、無防備になった頭蓋を  
叩き割った。

1対11。

しかし、

(……案外食いついてこなかったな)

山賊たちのうち、10人近くが峻を追いかけ回しているが、残りの2、3人ほどはまだ騎士たちと戦っている。これでは、峻が囿になっっている意味がない。

いきなり、どん詰まりである。

「つてぐえっ！」

考え事をした拍子に、峻は足元の木の根につまづいた。

何とか体勢を保つが、眼前に斧の刃が迫っていた。慌てて受け止め、軽くないなして隙ができたその手を斬りつける。

他方から剣が迫ってきた。防御が間に合わない

「おおおおおらアアアアアアアアアア!!」

救世主は唐突に現れた。

山賊たちの背後を突き、数の不利をもともせず手にした大剣で次々に屠り、山賊たちを次々と屍に変えていく。

「げっ！ 『ヴァルクの猛虎』じゃねーかよ！」

「おい、お前ら逃げろ！」

山賊は総崩れとなった。背後を真つ二つにされる者があり、武器を放り出して逃げ延びる者があり、立って動いている者は、あっという間にいなくなった。

「……剣で人を真つ二つとかありえなくないですか、団長」

「オイ最初に言うことがソレか！？ 単独行動に走った上に助けられて言うことがソレか！？」

何でだよ！ とカルドクが叫んだ。

「冗談すよ。……すみません、助かりました」

「つたりめーだ。今回は何とかなったが、俺たちだって手が塞がってることもある。いつでも助けてもらえると思つなよ」

「……気をつけます」

「おう。それで、この状況はいつたい何なんだ？」

カルドクは馬車の方を顎でしゃくつた。

さすがに防火措置を施してあるのか、火はもうくすぶっている。適当な処理ですぐに鎮火するだろうが、騎士たちの方は手遅れだった。

できれば助けられたが 峻は彼らのそばで跪いて手を合わせた。

「俺も知りません。馬車の質と状況から察するに、どっかの貴族が近隣の山賊に襲われたんでしょうね」

「貴族う？ 普通貴族がこんなところらねーだろ」

「この近辺の治安を鑑みずに、机上でルートを決めたとすればありえます。現にマルクさんも、ムルギキへの最短ルートとしてここを指定してきたらしいじゃないっすか」

「まあ、そう言われりゃそうだな」

「馬車1台だけってのが気になります、何らかの事情でお忍びでの移動だった とか何とかと考えるとけばいいでしょう」

「……………お前、よくそこまで頭回るな」

「そっすかねえ」

呆れるカルドクを適当に無視して、峻は上着を叩きつけて馬車の火を消した。馬車の扉を押し破らなければならぬかもしれないかもしれないと思ったが、意外に無事なようだった。

片手で開くらしいのを確認すると、峻は一度カルドクを振り返った。

「団長、どうします?」

「あん?」

「間違いなく厄介事ですよこれ。ここ開けちゃったらもう他人事にはできないですけど……どうしますか?」

「今更どうしますもへったくれもねーだろ。誰かいんならさっさと助ける」

「アイサー」

お前何今の掛け声、というカルドクの言葉を背に受けつつ、峻は馬車の扉をこじ開けた。

「おーい、誰かい………た」

薄いピンクのドレスを着た、14、5歳くらいの黒髪の少女だった。峻のもくろみ通り貴族の令嬢か何かだろう。少女は倒れたままピクリとも動かない。頭から少量の血が流れているので、頭を打って気絶したのかもしれない。

「どつだつ？」

「15歳くらいの女の子です。頭打って気絶してます」

「ふーん……よし、皆に連れて帰っとけ」

「は？」

「依頼を放り出すわけにもいかねーからな、3、4人くらいこつちに残す。馬がねエのはちよつと難儀だが……そう遠くねエし、交代でかつぎゃそんなにつらくねーだろ」

「いやちよつ……ええ！？ ウチで引き取るんすか！？ 近くの街に寄ってお上に連絡するとか、何か他にあるでしょ！？」

「……イヤ、軍とはあまり関わりあいになりたくなくてな」

「あんた何したんだ！？」

「ああもつうるせえ！ このまんま放り出すわけにもいかねーだろ！ とにかく連れて帰れ、団長命令だ！！」

さんざんに怒声をまき散らすと、カルドクはずんずんとその場を立ち去ってしまった。団長命令といわれてしまえば、下っ端の峻にはどうすることもできない。やれやれとため息をついて、峻は少女の方に手を伸ばしたが、その先に何かいた。

「きゅううううう……」

「……え、なにお前」

見た感じは、直径10cmくらいのピンク色の毛玉だ。そこにゴマ粒のような目と蝙蝠の翼、悪魔の尻尾がついている。こちらを睨んで唸っている様子では、彼を威嚇しているらしい。

「ご主人さまを守る忠犬、といったところだろうか。」

知ったこつちやねエ、と峻は切り捨てた。そもそも彼は、彼女に危害を加えるつもりなどない。

毛玉を無視して少女を担ぎあげようとしたが、

「きゅー！」

「痛ッ!?!」

毛玉が飛びあがり、峻の指に噛みついた。

何コイツもしかして毒とかある!?! 俺やばくね!?! と峻はあわてて振りほどこうとするが、毛玉もなかなかしぶとい。それどころか、毛玉はその顎により力を込めて

「~~~~~っ!?!」

その日、ロロの森に情けない悲鳴が響き渡ったという。

『魔物』という存在がある。

定義ははっきりしていない。馬や牛など家畜は故郷とあまり変わらないが、野生生物となるとその境界線はひどく曖昧である。故郷に存在するモノとそうでないモノというくり方もあるかも知れないが、峻は生物の種類などあまり知らないし、こちらにしかないだけで魔物という種類にはくくられない生物もいるかも知れない。さらには魔物の中にも稀に人間に飼育されているモノがいたりするので、その区別などもはやどうでもよかつたりする。たとえばコイツのような感じで。

「だーかーらー！ ご主人様には何にもしねえつつつてんだろ！！」

「きゅうー！」

「ああん！？ いろいろ世話してやってんのに何だその態度は！？」

「きゅー！ きゅうううー！」

「ああもうきゅーきゅーうるせええええー！！」

扱いの面倒臭さも、大差なかつたりする。

「ん……」

目覚めた彼女の視界に飛び込んできたのは、見知らぬ部屋だった。硬いベッドと小さな箆筥が置かれているきりの狭い部屋で、あまり掃除されていないのか少し埃っぽい。窓から日の光とともに鳥のさえずりが聞こえてくるが、くすんだ色の部屋は、拒絶されているかのような印象を彼女に抱かせた。

「ここは……?」

居心地の悪さを拭ってくれるものを求めて、彼女は視線を巡らせる。その先に、彼女は見慣れたピンクの毛並みを見出した。

「ムルムル!」

「きゆう！」

主人の呼び声に応じ、毛玉 もといムルムルは彼女の胸に飛び込み、嬉しそうにすりつく。その毛並みを撫でようとした彼女は、ふと隣に誰かがいることに気づいた。

「……………誰……………？」

最初に目が行ったのは、透き通るような白い髪だった。

一瞬老人かと思ったが、僅かに幼さの残る顔や肌を見るに少年のようだ。椅子に座ったまま眠っているらしく、時折こくりこくりと舟を漕ぎ、それに合わせて白い髪がふわふわと揺れている。

（ 綺麗…………… ）

好奇心に駆られて、彼女はそろそろと少年の髪に手を伸ばした。あと少して手が届く というその時、少年の両眼がぱちりと開いた。灰色の大きな瞳だ。

「 つー！！ 」

「……………おあ」

吃驚する彼女をよそに、少年は眠そうな手つきで眼をこすると、んがーと奇声を上げながら立ちあがって大きく伸びをした。

「……あー……うん、おはよー……」

「えっ!? え、ああ、その……」

「どっか、調子悪いとことか……ある? 気分悪いとか、頭痛いとか」

「え、えーと……大丈夫、です」

ふーん、と少年は半眼のままガリガリと頭を掻いた。

「……あ、何か食べる?」

「え」

「果物か何かあったと思うけどなあ……とにかく、何か食べてた方がいいんじゃないね」

「あ、その……い、いただきます」

「はいはい、じゃあ何か無いかちょっと見てくるわ。チビはどーだ?」

「きゅー」

「はいはい、了解ですよーっと。……………ふぁぁ」

大欠伸をしながら部屋を出ていく少年を、彼女はただ呆然として見送るしかなかった。

「……………き、今日はおとなしいね、ムルムル」

「きゅ?」

その毛並みを撫でながら、彼女は乾いた声で呼びかけた。

彼女にとっては己の半身ともいえるムルムルだが、人見知りか激しく、初対面の人には遠慮なく噛みつく。そのムルムルがこれだけおとなしいのだから、よほど心を開いているのだろうか。というかあの人さっきムルムルと喋ってなかったか？

「……………何者だろ、あの人」

それが、彼女の峻に対する第一印象だった。

「ここはカーチス領にあるヴァルク傭兵団だ。オレは団長のカルドクで、こっちが参謀のラグ。そこに居るのは団員のリヨウな」

「は、はい……」

噛みつかんばかりの雰囲気を纏うカルドクと怯えた様子の少女を交互に見比べながら、峻は他人事のように林檎の皮をむいていた。

「キミを発見したのは昨日、ロクの森で賊に襲われてたのに居合わせたんす。キミが気絶してたんでこちらで保護した方がいいと思って、ここに連れてきた次第っす」

「あ……ありがとうございます……」

(……なーにを威圧してんだか)

少女が助けを求めるようにちらちらとこちらを見るが、実のところ峻にもどうしようもない。

ラグは決して優しい人間ではない。峻も少女もこうして助けてもらってはいるが、これは全てカルドクの方針によるものであり、彼自身は傭兵団の都合を第一としている。要するに活動に支障が出ると判断されれば、女子供であろうと即刻排除する構えなのである。

一方のカルドク自身は、顔とか体格とかがアレなので愛想なんて不可能。はねっ返りの強い傭兵たちを束ねるにはともかく、女の子と話をするには明らかに不向きである。

だが、2人ともそれを開き直ったかのように、頑なな態度を崩さない。それを感じ取っているのか、毛玉（ムルムルという名前からい）も威嚇するような低い唸り声をあげている。

おかげさまで空気が重い。どうにも重い。

手の中の林檎の皮がむけ終わり、螺旋状の赤い皮がはらりと落ちた。

「……団長」

「あん？」

それを8つに切り分け芯を取り除きながら、峻はカルドクにぶっきらぼつに呼びかけた。

「顔が近い。ちょっと離れて下さい」

「なっ……いきなり何だお前!？」

「だから近いって言ってんでしょ離れるよ!

っ!かあんた方、ただ話聞くだけのはずなのに委縮させちゃってどうすんすか。ラグさんどう思います?」

「そっすねえ、団長顔が濃いーっすから」

「ちよつ……!?!」

「そんなに言うならここから先はキミに任せていいっすか? こちらも面倒臭いんで」

「面倒臭いってこの人………まあいいや、とりあえずそのデカブツを引き剥がして下さい」

「誰がデカブツだこの野郎!?!」

「はいはいデカブツはあっち行きましょーねー」

「ラグてめエエエこの野郎オオオオ!!」

喚き散らすカルドクがラグに引つ張られていくのをよそに、峻は皿に盛った林檎を少女に差し出した。

「ほい。食べる?」

「え、あ………い、いただきます」

少女はおずおずと一切れだけ取った。

「あー………さつきは悪かった、何か強烈なのが間近で怖かったろ」

お前まだ言うか！？ とカルドクが吼えたが無視した。

「あ、いえ……」

「まあ、こちらはあんたをどうこうするつもりはねーから、そんなに警戒しなくてもいい」

「……あ、ありがとうございます」

誠意をもって伝えれば、緊張はほぐれるものである。多少なりと安心したのか、少女はふわりと微笑んだ。

肩までかかった艶のある豊かな黒髪と、黒曜石のような大きな瞳。薄い桃色の唇は瑞々しく、柔らかな笑顔と相俟って、清らかな美しさを感じさせる。花が咲いたような、とはまさにこのことを言うのだろうか。

どうしても、その黒髪と黒い瞳に目が行くが

(……いかに、ちょっと鬱になるかも)

落ち着け。

今は関係ない。

この子は関係ない。

『はじめ』から、悪いのは俺じゃないか

(お、笑ったな。気を許したか?)

(さすが、顔がいいだけのことはあるっスね)

「そこ、コソコソうるさい」

野次馬をびしゃりと撥ねつけると、峻は林檎の二切れをつまんだ。一方は自分の口にくわえ、もう一方を毛玉のほうに投げる。毛玉は飛び上がって器用に丸呑みすると、そのままゴリゴリと咀嚼を始めた。

コイツどういう体の構造してるんだろう　気分が悪くなりそうなので考えないことにした。

「……あの……」

「ん?」

「一緒に居た騎士たちは……どうなったんでしょうか」

いきなり痛いところを突かれ、峻は少し返答に迷った。

しかし答えないわけにもいかない。彼らはこの子を守って死んだのだ。

「あー……………悪い、全滅」

「……………そう……………ですか」

少女は悲しそうにうつむいた。 峻も声をかけない。  
しばらく、沈黙が続いた。

「……………まあ、過ぎた話をしても始まらない。現実的な話に戻っていかか？」

「……………はい」

峻は努めて無表情を保ったまま沈黙を破った。少女も肚を決め、顔を上げる。

「ところであなた……………あなたあなたって言うのも何か面倒臭いな。名前訊いてもいい？」

「え、あ……………」

峻はラグのほつにちらりと目配せをした。

少女が貴族 少なくともそれなりの身分であることが予想される時点で、既に傭兵団の手には負えない。最初の対応も下手に勘繰

られれば誘拐扱いされかねないため、こちらとしては一刻も早く彼女を手放すのが望ましいのである。さつさと実家に送り届けてやるのが一番なのだが、肝心の彼女の身元が分からない。

ここで本名を教えてくれればそれで片付くのだが、こちらを警戒して身分を偽ったりすれば

「え、えーと……………レナ……………と、いいいます」

「レナ？ ただのレナ？」

「……………はい」

……………まあ、普通そうなるわな……………

どうやら思った以上に警戒されているらしい。まあ、会って数分の男達を信用して身元を教えろとは無理な相談である。

しかしこれでは埒が明かない。目配せでラグに助けを求めてみるが、彼も案が無いらしく肩をすくめた。

そしてこんな時に限って、空気が読めない奴が1人。

「するつてエと、アレか？ リョウみたいに行き場が無いってか」

「え？」

「ああ、実はこいつも」

峻とラグの音速の拳が、カルドクの間抜け顔にクリーンヒットした。

「ぐへらっ!？」

(何言いだしてんすかあんたはアアアアア!?)

(人が何とかして身元聞き出そうとしてるっつーのに何で引き取る気満々なんスか!?)

2人はカルドクの胸倉を締めあげた。全力で罵倒しているがむろん小声である。

(だ、だってよお……向こうが話す気ねえならこれ以上どうしようもねーだろ)

(だってもへちまもねェよこのすつとこどっこい!)

(一から十まで引き取ってどうするつもりなんスか!？　ウチは慈善事業やってんじゃないんスよ!!)

(……それ俺のことっすか)

(とにかく!　団長は一切口を挟まないで)

「あの……」

「なに!？」

峻が思わず噛みつくように言うと、レナはひっと怯んだ。しまったと峻は後悔したが、レナはすぐに気丈さを取り戻した。

「今、その……リョウさん? も……行き場が無い、と」

「あ、いや、それは、えーと」

「じ、実は、私もそうなんです! ちょっと人に言えない事情があります……」

あの、ここに置いてもらえませんか!? 雑用でも何でもしますから!」

たつぷり10秒、3人はポカンとした。  
毛玉が最後の一切れにかじりついた。

(ホラああ本気にしちゃったじゃないっスか!! しかもリョウくんの時とまったく同じ文言!!)

(ラグさんもしかして俺のこと嫌い!?)

(もういいんじゃないか? 嬢ちゃんがホントに貴族ならどーせすぐに音え上げる。そしたら諦めんのは時間の問題だろ)

(ええい、空気読めないデカブツは黙らっしやい!!)

ラグがカルドクを張り倒してる間に、峻はレナに説得を試みた。

「あの……雑用って言っても、けっこうキツイよ？」

「大丈夫です！ 根性はあるので！」

だがレナはそう言ってぐっ！ と拳を握った。いや、そんなどや顔されても困るんだが。

「イヤ根性つてあんた……だいたい傭兵団つて、女の子がいるようなところじゃねーんだけど……娼婦もどきみたいに扱う奴も中にはいるし」

「大丈夫です！ 私、自分のことは自分で何とかします！ その、しよ、娼婦みたいなのはできないですけど……でも、他のことなら掃除でも洗濯でも、何でもやりますから！…！」

「イヤだからそういう問題じゃ……」

「駄目ですか？」

レナは今にも泣きだしそうなばかりに瞳を潤ませた。何というか、妙な罪悪感が込み上げてくる。

……あれ？ 俺悪くなくね？ そうだよな？ 何か自信なくなっ

てきた。

「……ラグさん、俺もつ無理っす。やる気的な意味で」

「え、ちょ……あれえ！？ どうしたリョウくん！？」

「何か凄くモチベーション下げられました。バトンタッチ頼みます」

「ならもういいんじゃないか？ このまま放り出すわけにもいかなーだろ」

「だから団長は黙って下さいって誰が話こじらせたと思ってんスカ！？ リョウくんも何スかそのいい加減な理由若いんだからもつと頑張りなさいよ！！ つーかそもそもキミが変なこといわなきゃこまでこじれ げほげほっ……」

さんざんまくしたてたかと思うと、ラグは急に口元を押さえて咳き込みだした。何かけっこつ苦しそうである。

「す、すごく咳き込んでますけど……」

「大丈夫なんすか、アレ」

「ああ、コイツ体力ねえからな。まあそのうち収まるだろ」

20秒ほどごほごほが続き、ラグの咳はようやく止まった。

「あー……もう、イヤ……」

「おーい、大丈夫か？」

「そう見えるんなら、……ッづあー……医者にかかって下さい、団長」

「で、どうするんすか？ この子の処遇」

「いや……もういいっす。いーんじゃないっすか、引き取るなり何なり……げほ」

「ほ、本当ですか!？」

「いや、もう投げやりじゃないすか……」

ちょっと休んできます、とだけ言つと、ラグはあー……と息苦しそうな声を上げながら部屋を出て行った。

「……と、いうわけですけど」

「ま、アイツが否定しねえんならどうとでもなるだろ。そういつこつたから、よろしく頼むぜ、嬢ちゃん」

「は、はい！ ふつつか者ですが、よろしく願います!」

カルドクがいい加減なことを言ってレナのほうを向くと、彼女はベッドの上で丁寧に三つ指をついた。

何だこのシニールな光景は。誰か助けてくれ。

「おう。じゃー細けえ世話はリヨウに任せっから、当分はそいつの後ろくつついて回りな。

お前もしっかりやれよ」

「はい！ よろしくお願いします、リヨウさん」

「え、イヤ何で俺が」

「あ、そのドレスじゃ仕事ができねーな？ 替えもねえし。……リヨウ、お前の着替え貸してやんな」

「は？」

「とりあえずそれ着せたら、ラクスに嬢ちゃんの服買いに行け。心配すんな、『軍資金』はちゃんと用意してやるから」

カルドクはニタニタといやらしい笑みを浮かべながら部屋を出て行った。

「いや、その、……………え？」

どゆこと？ と陵はかすねた声で呟いた。

「だから、オマエは一緒に行っちゃいけねーの！」

「きゅー！」

「イヤ『きゅー！』じゃねーから。オマエみたいな連れ回してたら目立つでしょーが」

……こんな感じで、峻は毛玉と睨めっこをしていた。

事の起こりは3分前。ムルムルが自分もラクスに行く、とでも言うかのように啼いたのである。ご主人様が心配なのは分かるが、町中で魔物を連れ回していたら絶対に目立つ。むしろレナのためにならない……と峻は説得するのだが、嫌われてるのかあるじに似てるのか、なかなかどうして言うことを聞かない。

ところで、先程までいた部屋はレナが着替えに使っているので両者は廊下で睨み合っている。廊下のだ真ん中で直径10cmの毛玉と本気で睨み合う男………すごく気持ち悪い。

ちなみに、峻がなぜ毛玉の主張が分かるのかは、ツッコむ人間がないので謎のままである。

「……あの」

「しゅおー！？」

部屋の扉が唐突に開き、おずおずとレナが顔を覗かせた。

「準備……できました」

「あ、ああ、そう」

するりと出てきたレナの姿を見て、峻は絶句した。

何のことはない、粗末な麻のシャツとズボン。もちろん峻のもので、彼本人は年相応の平均的な体格だが、レナが幾分小柄なので若干だぼついて見える。

しかし何故だろう、この状況はまるで『事後に自分の服を貸してやった』といわんばかりである。当のレナが妙にそわそわしているので、峻自身も己が何かしでかしてしまったのではないかという気分になる。

………いや違いますよ!? 俺は無実だ! 潔白だ! そんな目で見ないで!

「あー……ああ、そう!」

「コイツ何とかしてくんねーかな? ついて行くって聞かなくて」

気まずい空気を誤魔化すように、峻はあわてて話題を変えた。

「どのみちムルムの扱いに困っていたのである。ご主人様から説得すれば、さすがに言うことを聞

「え……駄目ですか?」

だから目立つって話をさアアアアア！！

神宿ル剣：05

人ごみを掻き分けながら、目の前の小さな背中を追う。

ラクスは砦の近郊にある小さな町で、このあたり一帯で採れた農作物が取引されている。農耕地帯の真ん中にぼつんとあるので規模は小さく、治安も……まあ、よろしくない。

怒ったように大股でずんずんと突き進む彼女の前を、ガラガラとやかましい音を立てながら荷車が通り過ぎる。レナが二の足を踏んだ瞬間を逃さず、峻はその細い腕を掴んで引き寄せた。

「……………なあ、いい加減機嫌直せって」

とりあえず言ってみる。が、レナは不貞腐れたようにぷいと顔を背けた。

絞め殺したろーかこのガキ。

「……………」

「……………その……………うん、すみませんでした」

埒が明かないのでとりあえず謝る。実のところ彼女が何故へそを曲げているのか、峻には分からない。分からないが、とにかく平身低頭で神妙に謝っておけば、こういう手合いは勝手につけ上がって勝手に自己完結して、本人もよく分からないうちに機嫌がなおったりする。単純な奴らだ。

が、今回はそうはいかなかった。

「……………リヨウさん、私が何で怒ってるか分かっていますか？」

「え……………」

これは予想外だった。怒っている人間は、得てして周囲が自分の怒りやその原因を理解している、と思いつ込みがちで（むろん妄想である）、当然のようにその前提を信じて疑わない。例外は中二病くらいだろうか。

ナンノコトカナー、ととぼけてみた峻の顔を、レナはじろりと睨み上げた。「私の怒りなんか分かりっこない！」みたいなノリかと思っただが、どうやら違っらしい。

「……かわいい服を買わなかったから？」

実はそれほど悪いと思ってない。雑用なのだからとかく汚れがちな仕事だし、洗濯板に耐えうる丈夫な生地となれば、年頃の女の子が求めるような服ではない。

「……違います」

「あれえ？ ……じゃアレだ、スカート一着しか買ってやらなかった」

これも別に悪いと思ってない。素足を晒していればどこで怪我をするか分からない。気休めのような処置だが、ズボンで守ってるだけで意外と怪我が防げるものだ。

……団員達の精神的平穩を守るため、という目的もあったのは蛇足だろう。

「それも違います」

「ええ？」

馬鹿な！ 女の子が気にしそうなポイントは全て挙げた筈だ！  
という妙に芝居がかったセリフは心の中に押し止めて、峻はもう一

度あるえ？ と首をひねった。

その姿にはあ……と呆れたように溜息をつく、レナは踵を返して歩き出す。

「ええー……………お手上げ。ギブアップ。答えを教えてください」

「自分で考えてくださいっ」

「イヤ分かんないから訊いてんのに……………そんなケチつけられるようなことしたかあ？」

靴も買ったし、下着も……………」

「！！」

峻の口から「下着」という単語が飛び出た瞬間、レナの顔にさあっと朱がさした。気付いた峻に「最っ低！」と言い放つと、先ほどよりも荒々しい様子で人ごみの中に消えていった。

「……………そんなんアリ？」

どうやら「下着」という単語を軽はずみに使ったのが問題らしい。そつえばさつき露店で「女物の下着ある？」って訊いたっけ。

何だかなあ、と峻は頭を掻いた。確かに女の子の眼の前で使うにはあまりに露骨でいささか品が無いが、とはいえその程度のことではそを曲げたりするだろうか？ それとも、そういう潔癖さがつまり「育ちの良さ」ということなのだろうか。

まあ、無神経だったことは認めよう。

（だから、馬鹿丁寧にオブラートに包んで雅語でも使えってか？  
んな大袈裟な）

しかし悲しいかな、「下着の語彙なんぞ知らんがな」と開き直ってしまふのが峻の性分であった。やはり、悪いとはかけらも思っていない。

やれやれとため息をつくとき、峻は人ごみを押しつけてレナを探した。

小柄な彼女を見つけるのはひと苦労するかと思っただが、意外にすぐ近くで見つけた。金細工の露店の前で、蝶をあしらった髪飾りを物珍しげに眺めている。

「実家」にあるモノと比べたら、ずっと安物だろうに……

「これ、欲しいの？」

「え？」

「おっさん、これいくら」

「それなら、銅貨7枚だね」

「ふーん、まあ妥当かなあ……ん、これちょうだい」

「え、あの……」

「まいど。銀貨一枚だね、じゃあこれお釣り」

お釣りの銅貨を受け取りながら、峻は呆けているレナにずいと髪飾りを差し出した。

「なに、いらなの？」

「いえ、その……いいんですか？ 勝手に使っちゃって」

「ああ、お金？ いいんでないの、もともと使い切ることに前提で渡したんだろっし」

「でも……」

うーん、と峻は頭を掻いた。

「まあ……つまり何だ、

さっきは変なこと言って悪かった、これで勘弁してもらえねーかな」

峻はしおらしい顔をしてもう一度髪飾りを差し出した。ちりんと甲高い音が鳴る。

レナは驚いたように峻の顔をまじまじと見ると、堪えられなくなったのかくすくすと笑いだした。

「……ぷっ、ふふっ」

「……え、俺変なこと言った？」

「だってリョウさん……ふふ、やっぱり変なひと」

「ほっとけ。つか『やっぱり』ってどういうこと？」

むうと不機嫌そうなその顔を見ているとおかしくて、先程までつまらないことに怒っていたのが馬鹿馬鹿しくなる。レナはくすくすと笑いながら髪飾りを受け取った。

一方の峻はすごくぶる不愉快だった。たかが小娘の不機嫌をなおすためにわざわざ余計なモノを買い与えたというのに、何故か笑われた上に変人扱いされたのである。「解せぬ」とか何とか呟いていた。

「まあ何でもいいや。そろそろ帰るか？」

「はい！」

まあ、機嫌がなおってくれたのならそれで結構。買い物も済んだし、皆へ戻るうとして

「あれえ？ この辺じゃ見ない子だね、どこから来たの？」

突然割って入ってきた男に、射殺さんばかりの殺意を向けた。  
振り返ると、茶髪の軽薄そうな若い男が馴れ馴れしくレナの肩に手を回していた。誰？ という疑問を全身から発する彼女に対し、「あ、オレはソルっていの。よろしくねー」と勝手に自己紹介を始めている。お前の名前なんざ知るか。

「え、あの……」

「キミ、この辺の子じゃないでしょ？ キミみたいな可愛い子なら知ってるハズだもん」

ナンパか？ ナンパなのか？ 男連れてる娘にナンパしてくるとかいい度胸だな！ 別に痺れも憧れもないけど。ていうかこの至近距離で俺をガン無視ってどういうこと？ アレか？ 実はナンパに見せかけて俺に喧嘩売ってるとかそういうクチか？ ……流石にそれはないか。でもこれ絶対分かってやってるよな？ やっぱり喧嘩売ってるよな？ むしろそういうことにして殴り倒していいですか？

「ええと、ナルグの方から……」

「わ、すっぱー田舎じゃん！ じゃあこの街けっこー迷うだろ？ いろいろ教えてあげるから、ついでにそこでちょっとお茶しない？」

「……イマドキそんな古典的な誘い方があるか」

「ああん!？」

しまった、ツツコミ所のオンパレードだったからつい口をついて……  
ぼそりと呟いたつもりだったが、男の耳に入ったらしい。この程度の威圧など怖くもなんともないが、己の失態に峻はちつと舌打ちする。

怯みもしない峻に業を煮やしたのか、男はその襟首をつかんだ。その姿からは、先程の軽薄ながらも人の良さそうな雰囲気はまるで感じられない。

「つーかお前はさっきからそこでぼーっと突っ立って何なんだ？  
消えろよ糞野郎」

「突っ立っても何も、その子は俺の連れだ。最近の若者は洞察力に欠けてんのな」

「あんだと？」

そこで峻は、周囲の雰囲気が変わったことに気付いた。

いつの間にか、4人の男に周囲を取り囲まれている。レナに声をかけてきたのは優男といった感じだが、こちらは皆体格がいい。峻を袋叩きにするつもりなのだろうが、余裕綽々しやくしゃくなのかどいつもこいつも悪趣味な笑みを浮かべている。

峻が何も言わないのを見て、優男が下卑た笑いを浮かべた。

「知ってるぜ、お前。ヴァルクんとこの下っ端だろ？ どうせあの

デッカイのがいねーと何にもできねえくせに、調子こいてんじゃねーよ」

峻は応えない。息がかかって気持ち悪いな、と思っていた。怯えていると勘違いしたのか、優男は「どうした、だんまりか？ ビビってんのか？」と畳みかけている。よく見るとこいつ顔汚ねーな、と目を逸らすと、心配そうにこちらを見るレナがいた。

やれやれ、と峻は頭を掻いた。

「その股間に溜まった血を、もう少し脳味噌に回せんものかね」

「あ？ 何を言っ」

それは一瞬だった。

峻は優男の襟首をつかみ返すと、その首筋にナイフを当てた。

優男はひいっと息をのんだ。悲鳴さえ安っぽい。

「てめえっ！」

「おっと全員動くなよ。手元が狂ったら大惨事だからな」

色をなして詰め寄ろうとする男達を、峻がぴしゃりと黙らせる。

恐怖に顔を染めた優男が、懇願に近い形で目配せをすることでしょう

やく押し止まった。実はこいつがリーダー格だったらしい。  
どうでもいいことだった。

「あんた方、『頸動脈』って知ってるか？」

「なに、を」

「人体の急所の一つだよ。脳に血液を送る太い血管のことなんだけどな、これが表皮のすぐ下にあって、すごく危ないんだよ。」

「何で危ないと思う？ 今言った通り皮膚のすぐ下だから、けっこう刺激に弱いんだよ。凶器じゃなくてもいい、たとえば木の枝やペンでも簡単に突き刺さるし、もちろんあの世行き。」

「分かる？ ナイフとか当ててたら、どっという拍子でザクツといくか分からないんだよな」

峻は歌うように語る。

そのとんでもない内容に、優男は恐怖のあまり顔から血の気が見える見る引いていく。取り巻き達も思わず後ずさりをした。

そのさらに後ろで、金細工店の主人がおろおろしていた。ごめんね、巻き込んだじゃって。

すぐ終わるから。

「た……ただで済むと、」

「うん？」

「ただで済むと、お、思ってたのか？　こんなところで、お、オレを殺したりしたら、お前も、ただじゃすまねえ、ぞ」

「……へえ、意外と冷静だな」

顔こそ優男だが、意外と骨があるらしい。話す内容だけは一切峻に怯まず、交渉の体をなしているようにも見えた。

「で？　それが何か意味あんの？」

しかし峻は動じない。

からかうようにその顔を歪めると、峻は男の耳元でねっとり囁いた。

「もしかして脅しのつもりだった？」

「な、な」

「まあ確かに無事じゃ済まないよねえ。こんな往来のど真ん中で刃傷沙汰なんて起こしたら当然捕まるだろうし、殺しちゃったら絞首刑は免れないだろうし。」

あ、もしかしてあんた方他にお仲間がいるとか？　年端もいかない女の子を誑たし込もって連中だから、そんなに多人数なわけないと思っただけだ。そうかア、そっちはそっちで危ないよなあ」

峻はわざとらしく感心したような様子を見せながら、「ころころと他人事のように笑った。

男はもうまともに言葉を発することもできない。

「でもさあ、これって大事なことが抜けてない？」

「ひ、」

「分かるだろ？ 俺が殺されようが逃げ果せようが、どちらにせよあ..ん..た..が..死..ぬ..の..は..変..わ..ら..な..い..」

そのあと俺がどうなるかと、これから死ぬあなたには関係ない話だよなえ」

「どうよ？ 脅しになってないでしょ？ と峻は問いかける。ともすればその姿は、恋人に愛を囁くかのようにも見えた。しかし男の耳に入り込むのは、死の宣告。

得体の知れない狂気はまた、取り巻き達の軀をも凍らせた。

「まあこれ以上だらだら話してもしよーがないんだけど……どうする？ もう逝つとく？」

男の顔が土気色になった。

返事もそこそこに、峻はナイフをぐっと押しつけ

「　　っ！　ぎゃあああっ！！！」

男の恐怖は限界に達した。

ナイフを突き付けられているのも忘れて暴れると、力任せに峻を振りほどく。なすがままの峻からやっこの思いで解放されると、這う這うの体で逃げ出した。取り巻き達もはじかれたようにあとを追いかける。

あとには、ほっと胸をなでおろす露店の主人と、きよとんととしているレナと、何故か不愉快そうな峻だけが残された。

「リョウさん、大丈夫　」

「……帰るぞ」

「え？　ま、待って下さい！」

見当違いな心配をしてくるレナに対し、ぶっきらぼうに吐き捨てる  
と、峻は皆の方へずかずかと歩き出す。今度はレナが峻を追う様相  
になった。

己の醜態に、峻はちっと舌打ちした。

「団長、今後の編成の話なんすけど」

場所は変わり、皆の事務室。

基本的にカルドクとラグしか使わないので、以前はろくに掃除さ  
れず埃つぽかったのだが、峻が来てからは定期的に掃除をしてくれ  
るようになったため、それなりに快適になっている。

「何だ、やぶから棒に」

「いえ、リヨウくんがそれなりに使えそうだって昨日伺ったんで、  
彼も正式に『実務』に組み込もうかと思ったんすけど」

「ああ、そついやそんなことも言ったか」

「改めて訊きますけど、どうっすか？ 彼」

「うーん……まあ、思ったたより腕は立つわな」

「ふーん……じゃあ、『コロコロ』のほつはどつっすか？」

生物 特に動物は、その生命を維持するために、他者の命を奪わねばならない。

不老不死の霊薬でも飲まない限り、人間もその宿命から逃れることはできないのだが、傭兵の戦は事情が違う。同じ生きるための殺しと言えど、同じ人間を相手取るとどうしても抵抗が生まれ、ずぶの素人や新米などは心に負担が生まれるらしい。それが元で病んでしまうこともある。

1人2人殺した程度で気に病んでいるようなら、使い物にはならない。それがラグの懸念事項だった。

「どうだろうなあ……あのとき見た限りじゃ、別に何ともなかったと思うが」

「演技だった可能性は？」

「無いと思うがなあ。そんな余裕ねーだろうし」

「そっすか……じゃあ、あとで本人の意思を確認しときましようかね」

「おいおい、もう出すつもりか？」

「まさか。当分はあのお嬢さんの世話をしてもらいながら、手が足りなくなったときに出てもらうっす」

「ふーん。そうそう、嬢ちゃんの件なんだが……」

その時、事務室の扉がコンコンと鳴った。入れ、とカルドクが応えると、茶髪の若い男が扉を開けて入ってきた。  
ジャンである。

「団長、ただいま戻りました」

「おう。で、首尾は？」

「はい、連中の根城はここから南方のエツケ山。廃棄された城に棲みついてるようで、潜入してみた時は18人いました。城のだいたいの構造は目視で確認済みです」

「へえ……」

その短いやり取りだけで、ラグは大方を理解した。

「どうします？ 今日のうちに攻めときますか？」

「そうだな。何人が逃げ込んでるだろうし、警戒されてないとも限らん」

「そっすね、早いうちがいいでしょう。」

ジャンくん！ ドーツ、レイン、カルタス、あとグランツを呼んできて下さい」

テキパキと話を進める2人だったが、ジャンは「は？」と疑問符

を飛ばしていた。

「え……ちょ、いきなり攻め込んだじゃうんすか？ 何で？」

「あれ？ 団長、話してなかったんすか」

「言っでなかったっけなあ。まあいいや、ついでに連中にも伝えといてくれ。」

「……昨日、俺とリヨウが嬢ちゃんを連れてきたろ？ その嬢ちゃんを襲った山賊どもがちょっと引つかかってな」

「え、それって……」

「大方、誰か唆したやつがいるに違いねえ。ちょいと締め上げて吐かせるぞ」

05・(後書き)

この小説は、主人公が時々病みながら物語が進みます。  
そういう展開が苦手な方はご注意ください。

……でも文章力の都合でそんなに狂氣的に見えないという現実。パ  
ッと見たただの変な人。

「あ、おかえり！」

「おー、ただいまー」

レナを保護してから、3週間と少し。

峻は少しずつ「実務」に参加させて貰えるようになった。詳しいことは知らないが、先日山賊共を相手にそれなりに戦えたことが評価されたらしい。とはいえ主戦力として投入されるわけではなく、手が足りなくなった時に引っ張られる程度である。普段はレナとともに雑用に追われながら過ごしている。

帰還した峻たちの姿を認めると、レナは楽しそうにサンダルをつつけて峻に駆け寄った。

「今日はどうだった？」

「レトで魔物の駆除。どうだったも何も、俺自身は団長が暴れてる横を走り回ってただけだけど……」

お前こそ、洗濯物終わった？」

「うん、ばっちり！」

どうでもいいことだが、レナに懐かれていたりする。

世話係を受けもったこともあり、それなりの信頼を勝ちとってい

るのだろう。あるいは、あの巨漢と対比すると人畜無害な小僧に見えるのかもしれないが。

まあ、女の子に好意をもたれることに悪い気はしないし、それ自体は別にかまわない。かまわないのだが、

「いやあ、若いっスねえ」

「まったくだ」

「……リア充もげる爆発しろ」

「オヤジ臭い連中は黙ってる。つーか最後の何！？ 怖すぎるわ！」

その代償というべきか、団員から嫉妬の眼差し（と、茶化す気満々の視線）を浴びせられるようになった。峻とレナが一緒に居ると露骨に憎らしげな視線をむけられたり、ときどき靴に画鋲が仕込んであったりするのだが、今思えばみみっちい嫉妬だったらしい。そんな下世話な関係ちやうがな。

そんなに悔しいなら代わりに雑用やれ！ 絶対後悔するから！

「つてああーっ！！ お前、シーツ皺寄ってんじゃねえかよ！ ちやんと張って乾かさねーと！」

「ふえ！？ ご、ごめん！」

「……………どっちかっていうと、親子っスかね」

「だなあ」

だから野次馬はすつ込んでろ。

神宿ル剣：06

「あー、疲れた」

雑巾を絞り、洗っていた汚水を近くの木の根元に捨てる。衛生的にどうなんだと最初は思ったが、合成洗剤を使っているわけでもなし、そのうち勝手に分解されるだろう。そもそも下水道が整備されていないので、他に捨てようがない。この異郷にも上下水道の構想が無いわけではないが、王都と各領地の首都に整備されているのみで、こんな片田舎にありはしない。いわゆる「おのぼりさん」の最初のカルチャーショックが、その辺りの差異らしい。そういえばレナも「水道がない！」って騒いでたっけ。

盥たらいの中の水を流しだすと、泥臭いにおいが鼻につく。これを川に

流すのはちょっとなあ……と遠慮する辺り、まだ向こうの常識が抜けきっていないのだろうな、と峻は思う。どうでもいいことだ。どちらの世界に骨を埋めることになるかと、峻には大差無いことに見える。

「リヨウ、事務室の掃除終わったよ」

「ん」

かがんでいた峻の背に、レナの声がかかる。駆け寄ってくるレナに峻が立ちあがって脇にどくと、レナは抱えていた盥を傾け、峻と同じ場所に水を捨て始めた。この子はどうも、毎回決まった場所の水を捨てるものと勘違いしている節がある。適当にばらけさせることを教えておかないと、明日からこの辺りに異臭が立ち込めることになるかもしれない。

顔を上げると、南天に輝く太陽が見えた。どちらの世界でも、太陽は変わらず照らしてくれる。などという詩的な感慨は浮かばなかった。腹が減ったな、と思った。

「よし、洗濯物も掃除も終わったし……そろそろ残りの連中も帰ってくるだろ、飯の準備するか」

「うん！」

笑顔で答えるレナを見ると、何が楽しいんだかと峻はシニカルな気分になる。大方、ふだん見慣れているはずの使用人がやるような

労働を初めて知って、新鮮さを感じているのだろう。己の境遇に不貞腐れないのは人間的には大いに評価すべきだろうが、下女のような労働をいとわないのは貴族としてまずいんじゃないの？ と峻は無責任な心配をする。彼が「貴族」というものに対して、大いに偏見を持っていることは否定しない。

「……あれ？」

まあ、それも俺の知ったこっちゃねーんだけど。

団員達のために昼飯の準備をするべく屋内に戻ろうとした2人は、

その門扉に、男の人影を見た。

「誰だろ？ お客さんかな」

「……どうだろう」

「信用第一」をスローガンに掲げる参謀の方針により、ヴァルク傭兵団は風紀にかなり気を遣っている。団員各々の素行はもちろん、(賭博程度なら許されるが)やくざ者との関わりも極力避けるようにしている。そういうクリーンな運営をしている此処を訪ねてくるには、男の雰囲気はあまりに異質だった。

黒いロングコートを纏っているが、カルドクとも並ぶ2m超の偉丈夫なので小さく見える。黒人のような褐色の肌を持つ肉体は、よく鍛えられた筋肉が服の下からでも分かるが、カルドクと違い引き

締まっつていて、冷たい鋼のような印象を与える。

男がこちらに気付いて振り向いた。皺はあまりないが、老獪な雰囲気醸している。何の感情も見いだせない色彩の薄い瞳が、肌の色と明らかに不釣り合いだった。毛の1本も生えていない眉は、無表情の顔と妙に合っている。

「失礼する。ヴァルク傭兵団の方か？」

「え？ ああ、はい」

抑揚のない声だった。意外に礼儀正しいその言葉に応えたのはレナだけで、峻は沈黙を守っていた。

「カルドク団長に面会したい。取り次いで貰えないだろうか」

「あ、えっと……」

「レナ、ちょっと団長呼んできて」

「え？ あ、うん」

峻は男から目を離すことなく言った。レナは怪訝な顔をしたが、特に気にする様子も無くカルドクを呼びに屋内へ消えた。

視線だけで彼女を見送ると、峻は不信感を隠しもせず男を睨み上げた。そのあけすけな態度にも男はまるで動じず、相変わらずの無表情を続けている。

目の前に居ながらこれほど存在感の薄い人間というものを、峻は見たことがない。それでなくてもこの通り巨漢であるのに、圧迫感どころか、気を抜くと目の前のこの男は幻覚なのではないか、という錯覚さえ抱く。風に揺れる柳のような希薄な印象は、峻の中の胡散臭さをさらに加速させる。

何をしに来た？　自分でも気付かないうちに、峻は腰のナイフに手をかけていた。

「警戒しないでいい。私が来たのは、君が思うような目的ではない」

「なっ……！？」

「カルドク団長の依頼を受けて来ただけだ。構える必要はない」

自分でも無意識だった行動から、こちらの疑心をあっさり見抜いたらしい。警戒心を解くように語る台詞だが、むしろ不信感を増大させる。

こいつ、何者だ　という峻の疑念を、大股で歩いてきた男が粉碎した。

「おお、ゴージュじゃねーか！　誰かと思ったぜ」

……え、知り合い？

何すかその才チ。

「久しぶりだな、カルドク団長」

「改まったりすんな、わざとくさくて気持ち悪いぜ？」

「そうだ、昼飯食ってねーだろ？ せつかくだからうちで食ってけ」

「いや、お構いなく。すぐに依頼に取りかかるう」

「はん、いまさら変な遠慮すんじゃねーよ！

「そういうわけだお前ら、今日は1人分多めに頼む」

「……はあ……」

カルドクと一緒に来たレナに「どうしたの？」と訊かれたが、峻には答える気力がなかった。

「情報屋あ？」

「ああ、そうだ。業界じゃ【黒い風】なんて呼ばれる大物だぜ」

「……私自身は、あまり好きではないのだが」

不快感を匂わせる物言いだったが、仏頂面と抑揚のない声で言われても説得力がない。　　峻は内心でそう評した。

このゴーシユという男、誘われた時こそ断っていたが、すっかり峻たちと昼食を共にした。ふてぶてしい野郎だなと峻は少し思ったが、相手がカルドクだ、下手に断るより適当に付き合った方がいいのだろう。

ラグとは面識こそないが、お互いをカルドクからの話で知っていたようだ。他の団員達は明らかに初対面だったが、団長の知人だというところとあっさり納得した。こんな面妖な男があっさり受け入れられるなんて、団長の交友関係はどうなってるんだろう……あまり想像しにくかった。

そして場所は変わり、事務室。

実は応接室も兼用しており、今でこそ定期的に掃除しているが、峻が来たばかりの頃は埃まみれで汚い部屋だった。その時は「応接室が汚いとかどうかしてる！」と峻が顔色を変えて喚き、多少ごたごたが生じたのだが、それはまた別の話。

「まあ、それだけ評価が高いつてことっすよ。その腕を見込んで依頼したいことがあるんすけど……」

「その前に、何で俺たちが同席してるのか、説明してくれませんか？」

壁に寄り掛かった峻は腕を組んで、カルドクの隣に座るラグをじろりと睨んだ。峻の隣で椅子に腰かけるレナが、その険悪な雰囲気におろおろしていたが、無視した。

ゴーシュに何を依頼するにしても、この2人が同席することに意味はない。

わざわざ情報屋を雇うのだから、おおかたレナの身元調査だろう。しかしレナが身分を明かすことを拒んでいる以上、むしろこのことは彼女に知られないほうがいい。峻が適当な理由でこの場から引き離すのが妥当な対応である。別件だとしても、ますます2人には関係のない話である。

「ああ、それは今から説明します」

だが、ラグは峻の問いを聞き流した。  
もともと何かと食えない男だが、今度は何を考えてやがる？  
ゴーシュという男の存在と相俟って、峻の疑念は深くなるばかりだった。

「実はそちらのお嬢さんが先日、ロロの森で山賊の襲撃にあったんです。まあそこに居合わせたのが縁で、ウチで保護することになったんすけど。」

残念ながら、護衛をしていた騎士たちはお亡くなりになりましたね」

「！それは……」

最後の一言だけで、ゴージュはレナの身の上を察したようだ。無表情を保っていた顔がピクリと動いたが、その情動がかえって浮いていた。

「ただ、何となく引つかかるものがあつたんで、その山賊共のアジトを攻めて連中を捕えてみたところ　お嬢さんを襲ったのは、あの人物からの依頼だつたらしいんすよ」

誰ですか？　と峻は問うたが、ラグはかぶりを振った。フードを深くかぶっていたため、人物を特定することはできなかつたらしい、と答えた。

しかしこれは予想外だった。てっきりレナの身元調査の依頼だと思っていたが、あの連中のバックにいたらしい何者かの調査というわけか。というかあいつらを襲撃してたとか初耳なんです。いくら相手が山賊だからって無茶し過ぎだろ。

「そいつ自身は名乗らなかつたそうなので、個人を特定することはできません。」

ただ、【ボルツィトルガレン】という組織の者、と名乗っていたらしいっす」

「ボル……なんだって？」

「ああ、こちらでも活動しているのか」

聞き慣れない単語に峻は首をかしげたが、ゴーシュは何か知っているようだ。

「知ってるのか？」

「最近、有名になってきた連中だ。辺境での活動はあまり聞かないが……」

「詳しく教えてもらえますか？」

「『仕事』で関わるのは少なかったから、あまり細かくは知らないが。」

興りは北のサヴィア砂漠の向こう　カドレナ大公領だ。もとは雷の精霊を奉ずる宗教団体だったらしいが、いつしかカドレナの主権回復を唱える政治結社になったらしい。

おもな主張は、先述のカドレナ主権回復とベルキュラスからの解放、そしてそのベルキュラスの打倒。耳当たりのいい台詞で、カドレナ民衆からは絶大な支持を得ていたようだ」

峻の隣で、レナがびくりと反応した。ベルキュラスの貴族階級である以上、こんな話を聞かされれば、彼女も心中穏やかではいられない。　峻はそう思った。

ゴーシュがこちらをちらりと見た気がしたが、彼は何を言うでもなく続けた。

「もつとも、政治もろくに知らぬ輩がいたずらに民衆を煽っているだけで、当の大公家は不支持の意思表示を明確にしてきた。現大公のベルキュラス嫌いは有名だが、斯様な集団かように乗せられる体は避けたいのだろう。」

大公家を煽るのは無謀と見たのか、数年ほど前から、連中はこちらでも活動をしようになった。しばらくはこちらでも演説などを通して市民に訴えかけていたようだが、カドレナのみが得をする上比較的温和な現王家を打倒しようという積極的な意思が生まれるはずもない。どころか、国家反逆罪で摘発されることも度々あったようだ。

窮地に至り気が狂ったのか、連中は市街地や国家の重要施設での破壊活動、無差別殺人を始めた。軍も危険な集団として本格的に追いかけているようだが、なかなか尻尾が掴めず、今に至る。」

「……要するにテロリスト集団か」

「てる……？ 何、それ？」

「あー、イヤ、何でもない」

レナが不思議そうな顔をして訊いてきたので、峻はあわてて誤魔化した。どうやらこちらには「テロ」関連の概念がないらしい。

「なるほど……だけだよ、嬢ちゃんを襲わせたのは何でだ？」

「貴族の令嬢を捕えれば、その親に脅迫ができる。『スポンサー』になってもらうか、王宮内部での工作をし易くするためだろう。足がつかないように野盗をつかうあたり、こちらの想定以上に周到な

連中のようにだな」

「標的は貴族だけじゃないみたいっすね。先日護衛をしたマルク氏も、そいつらが最近話題になってるから怖い、みたいなことを言っていましたし。……こっちはただの自意識過剰だと思っすけどね」

うーん、とカルドクは腕を組んで唸った。

「実際のところどうなんだ、俺達傭兵団の活動に直接支障がありそうか？」

「どうだろうな。連中は破壊活動について、より人の多い都市部で行う方が効率的であることを知っている。だからこそ辺境での活動はあまりしてこなかったようだが……今後、辺境での根回しがないとも限らないだろう」

「悪かったな、田舎で」

「まあその辺も含めて、ゴーシュさんには調査を依頼したいんですが。よろしいっすか？」

「了解した。では、契約の話に移ろうか」

……ところでレナはともかく、何故俺がここにいるのだろうか。

「ところで、これは関係ない話なのだが」

カルドクとの契約が済んだころ、ゴーシュがふと口を開いた。

「最近、王女が失踪したという噂が流れている」

「王女が失踪お？」

「何でまた」

ゴーシュの思わぬ言葉にカルドクとラグは素っ頓狂な反応をしたが、峻の隣でびくりと肩を震わせるものがあった。峻が横目で見やると、レナはあからさまに動揺し、眼が泳いでいた。

どうしたんだ、こいつ。

「私も詳しいことは知らない。市井で流れている噂を耳にしたただけだからな。もちろん王府側は否定している。親馬鹿で有名な現王が何も発言していないあたり、事実無根である可能性が大きい。」

ただ、以前から予定されていた王立学問所への慰問が取り止めになっっている。失踪こそ無いにせよ、実際に王女の身に何かがあったのかも知れない」

「ふーん……」

「こんな辺境の傭兵団が巻き込まれることも無いだろうが……団長は騒動を呼び込みやすいから、一応伝えておこう」

「どういう意味だこの野郎!？」

「分かります、すごく分かります」

「やはりそうか。大変だな、参謀殿」

「だからどういう意味だっけ訊いてんだろーがアアアア!！」

この至近距離でカルドクが吼えているというのに、レナはまるで気付いていない様子だった。なんとというか、心此処にあらずといった感じである。

……王女失踪、ねえ。

「……おい、レナ」

「ひゃあっ!？」

耳元で軽く声をかけると、レナは大袈裟に反応した。耳を押さえ、

ばつが悪そうに赤面している。  
カルドク達は相変わらず騒いでいるが、まあ放つといていいだろ  
う。

「……そこまでびっくりされると、流石に少し傷つくな」

「う、ごめん……」

「イヤ本気じゃねーから軽く流せよそこは。」

……それより、お前さつきから挙動不審だぞ。大丈夫か？」

「……う、うん。大丈夫……ごめん」

そういったところで、全然大丈夫そうに見えないんだがなあ。流  
石に可哀想なので、これ以上責めるのはやめた。

「……お前の事情と、何か関係あんの？」

「え？」

「王女の失踪。お前がここにいるのと、もしかして関係あんの？」

「……………うん」

しばらく返答に困っていたが、レナは消え入りそうな声で小さく  
首肯した。

まあ、それだけ分かれれば結構。詳しいことは、峻には関係ない。

「ふーん。ま、別に何でもいいんだけどさ」

「え……………ねえ、リョウ」

「うん？」

「その…………訊かないの？ わたしと、どういう関係があるのか」

「うーん、そう言われてもなあ」

峻は面倒臭そうに頭を掻いた。

「事情を聞いたところで、俺に何が出来るでもないからな。

お前だって、話したくないことを根掘り葉掘り訊かれたくないだろ？ そんなんじゃお互いに時間の無駄だ。

だから訊かない。レナが話したくなったら、その時はちゃんと聞いてやるよ」

そう考える俺は酷薄だろうか。自分では、よく分からない。

レナはしばらくきよとんとしていたが、ふふ、とおかしそうに笑った。よく笑う子だ。

「リヨウって、やっぱり変だよねえ」

「結構失礼だなお前。まあ、よく言われるけどな」

いや、今まで言われてきたのはむしろ

「団長！ ラグさん！！」

部屋の扉を蹴破ってきたジャンの音が、峻の意識を現実に戻した。

「バカおまえ、ノックぐらいしろっつってんだろ！」

「わ、すみません！ ……っつていやいやそうじゃなくて！」

何やら勝手にノリツッコミを始めたジャンだったが、憔悴した様子で「窓の外、見てください！」と喚いた。

「何だ、嵐でも来そうか？」

「嵐どころじゃねーよ！ すっかり囲まれちゃった！」

からかうように言う峻に対し、ジャンは半ばパニック状態で返す。その言葉に顔色を変えたカルドク達はこぞって窓に駆け寄った。

峻も、やや遅れて窓の外を見やる。

はてさて、いったい何があるのや

「……………は？」

4 mはあるのではないかという、見上げるような巨体。鈍色にひいろの光沢を放つ甲殻は、その全身を隙間なく覆っている。異常に発達した腕 あるいは前脚なのかもしれないが、今の峻にはどうでもよかった には指らしいものはない。申し訳程度の小さい足が付いているが、どこまで役に立っているかは分からない。クルミほどに見える頭の中心で、虚ろに輝く赤黒い眼が6つ。

「あれは……………【イシマエル】……………!？」

ラグが、かすれた声で呟く。

「何で、11111……………」

峻の心臓が、どくと高鳴った。

イシマエル。

人型をした特異な魔物とされるが、行動習性上その生態系は謎に包まれている。生物としてあり得ない歪んだ身体構造、凶悪にして残忍な性格、ヒトを捕食することから、魔王の配下という迷信を伴って一般に知れ渡っているが、その真相を解き明かした人間は未だ存在しない。

さて、ヒトの天敵と名高い彼らの中でも、特に認知度の高い【ゴーレム】。緩慢で知能レベルも低いが、全身を覆う甲殻はいかなる攻撃をもってしても傷一つつけることができず、その巨躯と重量により繰り出される攻撃を防ぐ術はない。戦場に放り込めば（放り込むことができればの話だが）、1体で兵士千人に匹敵するといわれる。

そのゴーレムが、3体。皆をぐるりと取り囲んでいる。

「……………どうすんすか、アレ」

彫像のごとく動かないそれを窓から盗み見ながら、峻が忌々しげにつぶやいた。

「どづつっー言われてもなあ。白旗揚げるか？」

「冗談に聞こえないんすけど、それ」

「動かない」

峻と並んでゴーレムの様子を見守っていたゴーシュが、ふとそう言った。

ジャンは、団員達への戦闘準備の連絡と別方角からの偵察の任を受け、既に部屋にはいない。カルドクは大剣を帯び、神妙な面持ちで椅子に座っているが、ラグは落ち着かない様子でそわそわと部屋を歩き回っている。参謀がそんなんでいいのか、と思ったが口には出さなかった。カルドクに拳骨で止められたのでわざわざ言うまでもなかったが。

レナもショックが大きいのか、椅子に座ったままおろおろと目が泳いでいた。いつの間にか部屋に入ってきた毛玉が、ご主人様を守るように毛を逆立ててレナの膝の上に鎮座している。

「ああ？ 何だ、藪から棒に」

「連中が仕掛ける様子がない」

「そういえば……まだ包囲の準備をしてる、とかじゃないスカ」

よくみると、3体のゴーレムの間に、ぼつぼつと人影が見える。ここから見る限りは10人程度 察するに20人未満だろう。傭兵団の戦力を考えると、真正面から挑むには多少戦力不足に思われるが、ゴーレムを恃んでいるのだろう。3体も配置しているのを考えると、むしろ戦力過剰な気がするが。一様に黒装束をまとっており、フードをしているため顔は分からない。

「いや、隊列はすでに整っている。向こうにしてみれば、いつでも攻撃できるはずだ。

だが、動かない」

「どづいづいことでしょ………そもそも、奴らは何者なんでしょう？」

「おそらく、『ボルツ＝トルガレン』だ」

ゴーシユの言葉に、事務室がざわりと動揺した。当然だ、先程まで話題に上っていた連中が、こうして目の前にいるのだから。

本当スカ！？ と顔色を変えて問うたラグに、ゴーシユはうなずいた。

「人に馴れぬはずのイシマエルを使役する術を持つと、以前耳に挟んだことがある」

「でもよ、何だってそんな連中が、オレたちを攻めようとしてくんだ？」

「我々に対し、何らかの要求がある……ってところでしょっか」

おそろくは、とゴーシュは肯定した。

「団長、これ！」

再びばたばたと騒がしい音を立てながら、ジャンが事務室に戻ってきた。その手に矢を握りしめているが、その棒の部分（箆の筈らしい）に紙が結び付けられている。矢文だ。

「お、そう来たか」

「え？ あ、はい」

「はてさて、何が書かれているやら……」

ゴーレムの衝撃がよほど強かったのか、カルドクもラゲも、矢文

が寄越されたことに驚きはしなかった。意外そうな反応を見せるジヤンからそれを受け取ると、カルドクは全員に見えるように机の上で広げた。

峻は、そのやり取りを上の方で聞き流していた。

連中が何を考えているか、気にならないと言えば嘘になる。あんなデカブツを持ってくるのだから、碌な目的でないのは目に見えるが。

問題は、そのデカブツ　ゴーレムだ。

峻は己の中に芽生えた、なんとも形容しがたい感情に戸惑っていた。

俺はアレを知っている気がする。

(んなわけねーだろ。あんなトンデモ生物、生まれて初めてみたわ)

アレを生かしてはいけない気がする。

（『魔物』だからだろ？ 己の常識から外れたモノを認めたくないだけだ。

わーお、俺って自分で思うより狭量だったのな）

否。

あれは、許されざる命<sup>モノ</sup>。

（馬鹿馬鹿しい。

命なんて、誰かに許されて存在してるわけじゃねーだろ）

「……………オイ、何だこりゃ」

ぼつりと漏れたカルドクの間抜けな声が、峻の耳に飛び込んできた。はっと我に返ってそちらを見やると、一同が机を囲んで硬直<sup>フリーズ</sup>している。レナだけは椅子に座ったまま、なりゆきを見守っていた。

「……どうしたんすか？」

「……これ……」

呆れ顔で声をかけると、ジャンが文を突き出してきた。峻は文を受け取り、いまだ文法さえ把握できていない未知の文章を読

「って読めねーっ言っただろ！ パツと渡されても困るんだよ！！」

「あつ、悪<sup>わり</sup>イそうだった！」

「イヤミがこの野郎！？ どいつもこいつもこごぞとばかりに見せつけてきやがって！ だいたいこの程度の文明レベルなのに何でこの辺り異様に識字率高いんだよ！？」

「悪かった！ オレが悪かった！ だから抑えて！」

「いいから読めよちくしょう！」

「あつ、ごめん！」

ゴージュがちらりと峻の方を見たが、それに気付く者はいなかった。

突然スイッチが入ったようにまくしたてる峻になじられ、ジャンは少し涙目になりながら文を受け取ると、ごほんと咳払いをひとつして読み上げた。

「『ベルキュラス王女を差し出せ。半刻の後返事が無くば、従  
う意思無しと見なす』」

……

……

……

……うん？

「……何だって？ ちょっと聞こえにくいところがあったんだが、  
もっかい読んでくれない？」

「『ベルキュラス王女を差し出せ。半刻の後』」

「王女？」

「そう」

一同が硬直した理由を、峻は身をもって知った。  
つまり何だ、これは要するに？

「……まさかオレ達、向こうの勘違いに巻き込まれたんじゃないか？」

「いや、違うと思うが」

カルドクが頓珍漢な事を言った。

「えー、でもゴーレムを持ってくるような、イカれた危ない集団っすよ？ 思い込みでここにいると妄想した……とか、ありそうじゃないっすか？」

「だいたい、ウチに王女様がいるわけ無いじゃないスか」

やだなあハハッ、とラグは鼻で嗤った。連中の言い分などまるで聞く気が無いし、身に覚えもないのだろう。この人、大事なところで鈍いんだから 峻はこっそり嘆息した。

しかしラグのみならず、事務室は一気に気の抜けたムードになっていた。謎の過激集団（笑）のあわれな道化つぷりを嘲笑する空気に包まれてしまい、いまだ緊張感を保っているのは峻とゴーシユくらいである。

否 もう一人。

「で、どうします？ 素直に言ったら帰ってくれますかねえ」

「たぶん、無理だと思います」

へらへらと笑うジャンの冗談混じりの問いに、ぼつりとレナが応えた。いつもと違う低い声に違和感を覚えた一同がそちらを見やると、レナは静かな面立ちで顔を上げた。そこに、いつもの明るい笑顔はない。

「ラグさんやゴーシュさんのお話を聞いていたときから、まさかとは思っていましたが、こんなに早く見つかるなんて」

「……………どういう……………意味、スか？」

レナの言葉の意味を理解できていないラグが、ぼかんとした顔で問うた。一瞬の逡巡の後、レナは口を開いた。

「もしかとは思っていたが、これは」

「私の名はエレナⅡテイルⅡベルキュラス。現ベルキュラス王カルザスの娘にして、王位第一継承者です」

一同、言葉が出なかった。

信じられないのか、信じたくないのか。長い沈黙の後、ジャンがおどけるように笑った。

「や……やだなあレナちゃん！ こんなタイミングで冗談言わない  
でよ！ オレちよつと信じかけちゃったよ！ ねえ団長？」

「……今言ったのは、本当のことか」

（無視された……）

「本当です。……といっても、証拠なんてないんですけど」

参ったなあ、と膝の上のムルムルを撫でながら、レナは力なく笑  
った。

「だろうな。証拠がねえんなら……」

「ホントだと思いますよ。王女ってのは」

「……え？」

ふんと鼻を鳴らしたカルドクをさえぎるように、峻がそう言い切  
った。

レナがはつと顔を上げた。峻は、その眉間にいつも以上に深い皺  
を刻んでいたが、まっすぐにレナを見つめ返した。その瞳には、一  
片の迷いもない。

「何で言い切れるんだ？」

「レナは良くも悪くも素直だから、こんな大嘘吐けるほど器用じゃない。吐いても100%顔に出ます」

「うう……信じてくれるはずなのに、すごく傷つく……」

レナがよよよと泣き崩れた。何をいまさら。

一方、ゴーシュを除く3人の顔がひきつり、いやな汗が垂れた。

「で、でも、そうだとしても、彼女が、おお王女である根拠には……」

「ゴーシュさん、王女失踪の噂が流れたのっていつ頃からなんすか？」

「正確には分からないが、2週間ほど前だ」

「そすか。で、ウチでレナを保護したのが約3週間前。情報が漏れだすにはちょうどいい時期だと思います？」

「そ、そそそれだって偶然かも知れな……」

「レナが襲われたのと、王女に何かあったのが全く無関係で、偶然同じタイミングで起こったっていうんすか？ それよりも、『当事者』が<sup>イコール</sup>レナであると考えた方が、事実として簡潔だし自然です」

「私も同意見だ。以前の襲撃のことも鑑みるに、奴らがこれだけ執

着するの、彼女が『王女』であると考えれば辻褄が合う」

「お、お前まで……」

さらりと言ったゴージュの一言に、一同はガガーンという擬音でも聞こえそうな顔をした。ゴージュがレナを信じたのは確かに意外だったが、とりあえず事務室は信じざるを得ない空気になったようだ。ちなみにラグは「じゃ、じじじじじじじじじ、おお王女様に雑用させてた……ってことスか!？」と騒いでいた。気にするのそこか。

それはいいとして

レナは何故、このタイミングで正体を明かした？ 峻にはそれが気になった。黙っていたとて、上手くいけば事態を穏便に片付けることができたかも知れないのに、それ以前に、無益な騒動を誘発しかねない。それが分からない彼女ではないはずだ。

ふと、レナが立ちあがった。何事かと峻は顔を上げ、

止めなければ、と思った。あの子を行かせてはいけない、と思った。

その瞳が、横顔が、あまりに痛々しかったから。

「おい、どこ行くんだよ」

答えず、レナは扉に向かった。ほぼ反射的に、その手を掴んで引き止める。力が強すぎたのか、「いた……っ」とレナは小さな悲鳴を上げた。あるじの危機を察知し、椅子の上の毛玉が低く唸る。

「何するの？ 離してよ」

「……断る」

レナにしては珍しく、敵意をむき出しにしてきつと峻を睨みつけた。峻も真正面から睨み返す。暫しの間をおいて、レナは僅かに視線を逸らした。

だから言っただよ。顔に出てんだよ、お前。

ちょっと強く握り締めれば、折れてしまいそうな細い腕。体は峻のほうが強い。だが、心はどちらが強いのか、今の峻にはわからない。

その華奢な体で、精一杯強がって。何を背負おうとしている？

「私が、行けば」

「あ？」

「私が行けば、彼らは、引き下がってくれる、はず」

「ふざけんなよ、お前」

怒気をあらわにした峻の声に、カルドクたちがようやく気づいた。馬鹿げてる。俺達の命と引き換えに、奴らに捕まるなんて、そんなのおかしいだろ。

お前が何をしたんだよ？ 奴らに従う義理が、どこにあるんだよ？

「それがどういうことか、ホントに分かってんのか」

「王族は民のためにあるもの。わが身かわいさに、貴方達を危険な目に遭わせるわけにはいかないの」

「だからって」

「貴方達だって、王女なんて扱いに困るでしょ？」

「言ってもないことを勝手に思い込んでんじゃねエよ！..」

思わず声を荒げる。怯んだレナの姿を見て、峻はちっと舌打ちした。

しかし意外にも、レナはふふつと笑った。

「心配、してくれて、ありがとう」

レナの腕をつかむ峻の手に、レナはそっと掌を重ねた。

「でも、大丈夫」

「.....何がだよ」

「大丈夫だよ。私を利用するつもりなら、すぐには殺さないはずだから」

「だから、」

「助けてもらったお礼……ってわけじゃないけど」

キミに、死んでほしくないから。酷く現実感のない言葉が、鼓膜を震わせ、空虚に脳を響かせる。

顔を上げると、そこにはレナのいつもの笑顔があった。

毎日毎日、小さなことにも目を輝かせて、

何が楽しいのか、終始にこにこしていて、

何だかんだ言って、その笑顔が好きだったのかもしれない。

だから、許せなかった。

彼女が、今にも泣きそうな顔をしていることが、そうさせている自分が、情けなかった。

だから、峻は彼女から目を背ける。

「団長！ 何とかならないんすか!?!」

「っ言つてもなあ。ゴーレムの相手なんて、殆どしたことねーぞ」

「あ、3月くらい前にありませんでしたっけ？ ゴーレム討伐の依頼」

「あーあつたなー。あん時はどうしたっけな？」

「あれっスよ、後ろから鎖で、足をぐいーっと。ゴーレムは下半身が弱いつスから」

「そうそう、総がかりで引っ張ってやっとでしたよね」

「今回は無理だろう。足元に人間がいる以上、奴らを掻い潜るのは至難の業だ」

狙ったようにノリノリで作戦会議を始める一同に、レナはぼかんと呆けた顔をした。

「……おい、今の顔すごく間抜けだぞ、お前。ホントに王女か？」

「みんな、どうして……」

ポツリとつぶやいたレナの一言に、一同（ゴーシュ除く）は「何をいまさら」という顔をした。

「貴女を引き渡したところで、連中があっさり退くと思います？」

口封じか何かで結局潰されるのがオチっス」

「ゴーレムさえどうにかできりゃ、後の連中なんざ何とでもなるんだ。王女だか何だか知らんが、ガキにいらん真似される義理はねえ。……です」

(締まんないっスね、団長)

(やかましい！)

「レ……王女様を、あんな不埒な連中にやるわけにはいかねーよ！……じゃなかった、いかないっす！ そっちの方が、断然カッコイイし！……っです！」

ぽかーんとしたレナに、どーよ？ と峻はニヤリと笑ってみせた。

「お前1人の犠牲なんて、誰も望んじやいないみたいだぜ」

「……み、んな……」

レナの瞳から、一筋の涙がこぼれた。  
ほれ、顔に出てるぞ。

「……ったく、無理して強がるからだ、バカもん」

「っく……っめ……」

「ん。分かってんならいい」

何だかんだ言いつつ怖かったのか、堰を切ったように泣きじゃくるレナをあやししながら、峻はまた椅子に座らせた。きよとんとした顔の毛玉が、ご主人様の目尻を舐めた。もともと忠犬根性丸出しだったが、こうした仕草を見ると、本当に犬に見える。

「で、結局どうします?」

「完全に手詰まりだな」

ジャンの問いかけに、カルドクはうーんと腕を組んで唸った。

目の前のゴーレムをどうにかできなければ、未だ傭兵団が窮地であることは変わらない。安全かつ確実に斃すには、離れた間合いから急所を一撃で仕留めるのがよいのだが、無論とんでもなく精密な射撃技術が要求されるし、中途半端な威力では逆効果の恐れもある。余談だが、この世界にも警備<sup>いしゆみ</sup>いわゆるクロスボウがある。威力や射程は一般的な弓を上回るのだが、矢の装填が致命的に遅く、その欠点をカバーできるほどの命中率でもない。あまり流通していないらしく、現にここでも『備品』程度の扱いである。

「誰かいないんですか? ヴィルヘルム・テル的な人が」

「何かすごい無茶振りされてる気がするんすけど。誰スカそれ」

駄目らしい。

フィクションではこういうタイミングで都合よく『弓の名手』(自称・他称含む)みたいな人物がいたりするのだが、所詮虚構の産物ということなのだろう。妙なところで現実的なんだからこの世界は。

さて、どうしたものだろうか。一同ががっくりと肩を落としたとき、意外な人物が沈黙を破った。

「秘策と言えるほどのものではないが……あるいは役に立つかもしれない」

「お、何かいい案があるか？」

ゴージュだった。

カルドクの問いにうなずいて答えると、懐から布包みを取り出す。一同に見えるように机に置くと、包みをめくって開き、それをあらわにした。

直径15cmくらいの、鋼色の円盤。縁は鋭利な刃になっているらしく、中心がくり抜かれ、ちょうど指が1本か2本はいる程度の穴があいている。

「何aska、これ？」

「『魔導具』だ」

……あれ、何これCD？

## 07・(後書き)

2ヶ月ぶりの更新ですサーセン！m(´`´)m  
どうも、名無しだけど権兵衛です。

06・投稿時には戦闘シーンが入るだろうと思っていましたが、伏線回収とか説明とかで思ったより時間とることに。

意外と字数以上に長いイメージが、私の中ではあります。まあ字数じたいが相当なんだけども。

しかし2ヶ月かかったあげくこの程度の出来ってどうなのと思いましたが、まあそれはそれとして。(いいんか)

今回お喋りばかりで終始しましたが、次回こそ戦闘シーンです。うげえ。

このとおりスピード感とか盛り上がりには欠ける描写なので、いまいちgdgdになりそうな予感がしますが。

もしかしたら次回も2ヶ月かかるかも知れない。(ええー)

まあ、私も可能な限り頑張りますので、気長にお待ちいただければ幸いです。

ちなみに、執筆状況は活動報告で逐次報告しております。

では、次回までしばしお待ちくださいませ。

08・(前書き)

今回は流血など、非常に残酷なシーンが含まれています。  
そうだったものが苦手な方はご注意ください。

……そういったものを期待されている方にも、あまりお勧めできません。  
(文章力的な意味で)

きっかけはカルドクの一言だった。

『そついえばお前、剣どーした』

『へ？ ああ、いきなりの急展開で、取りに行ってる暇が』

『馬鹿やろオ緊急事態に丸腰があるか!!』

『うるさっ!?! いやゴレム相手に刀持ってたって仕方無いじゃないすか』

『仕方があるとか無いとかじゃねーんだよクソガキ! んな心構えで勝てると思ってるのか!?!』

『いやいやこれはもう精神論でどうこうできる事態じゃな』

『いいから取ってこんかいイイイ!!』

……という次第で、峻は己の荷物を漁っていた。

「あー、まだ耳がキンキンする……あんにゃろ」

悪態をつきながら、峻はがさがさと刀を捜す。私物はせいぜい服が数着とその他少々くらいのはずだが、なかなか見つからない。どこか別のところに紛れてしまったのだろうか。

「お、あつたあつた」

あららー？ と何やら色んなところ（具体的にはゴミ箱の中とか）を捜していた峻は、ついに寝台の下にくすんだ色の護拳を見つけた。何か妙に光ってなーか と思いつつ、峻は寝台の下に手を差し入れる。その指先が柄に触れた途端、峻の心臓が、強く跳ね上がった。

「っ……！？ つくあ………が……ッは、オえっ………」

乱れた血流に、全身の筋肉が動揺する。肺が悲鳴を上げる。視界が明滅する。酸素を求めて大きく開かれた口から、唾液がぼたりと零れた。

無意識のうちに、峻は刀を手繰り寄せた。しかし縋りつくようにその柄を強く握り締めても、苦しげに胸元を抑えても、全身を冒す動悸は治まらない。朦朧とする意識を、声なき声が覆い尽くしていく。

殺せ。

(なに、を)

あれを殺せ。

嘔吐感が込み上げてくるが、喉は頑なに塞がったまま、フラストレーションを飲み込んだ胃液がその内壁を灼き続ける。  
内外の大混乱にぐるぐると渦巻く脳裏に、ある映像がよぎった。

鋼色の甲殻。巨岩の如く節ばった全身。赤黒い六ツ目。

(ゴ……レム?)

殺せ。

(え、)

あれは『魔』。

『魔』は、滅びねばならぬ。

全身の力を振り絞り、刀を杖代わりにふらふらと立ちあがる。顔を上げると、ぽかんと開かれた窓からゴーレムの凶体が見えた。醜いものだ、と嗜虐的に笑うと、不思議と落ち着いた。

そうだ。殺せ。

あれを屠<sup>ほぐ</sup>るために、俺は生まれたのだ。

この得体の知れない衝動に名を与えるとすれば、それは渴きにも似た欲求だった。好物を見たときの食欲にも、害虫を見たときの嫌悪感にも似ているなど、峻はどこか冷めた思考でそう捉えていた。

意識が飛びそうになるような衝動を何とか抑え、  
峻は事務室に戻ってきた。

「剣1本取ってくるだけでいつまでかかってんだ、このバカ」

「……すみません」

カルドクが噛みつくように言った。何て理不尽なと思ったが、ゴ  
ーレム相手にピリピリしているのだろう。こちらもやり合う気力が  
なかったので、とりあえず謝って流した。この不穏な感情を告白し  
たところで理解されるわけがないし、峻自身も理解しかねているの  
だ。

「魔導具の方は、どうなりました？」

「ええ、いましがた、使用者の認証が完了したところス」

誤魔化すように水を向けた峻に、ラグがやや緊張した様子で答えた。

『魔導具』とは、使用者の魔力に反応して魔術的な効果を発揮する、いわば魔術の媒体である。原理のあたりはよく知らないが、素養さえあれば魔術の知識がなくなるとも扱えるぶん、モノによつては精密な操作が要求されるらしい。

さて、今回ゴーシュが持参した魔導具は『魔導式自立飛行性円盤型有刃兵器（試作）』という代物。長つたらしいその名の通り、ひとりでに浮き上がり、使用者の意のままに飛び回る円刃である。ちなみにモノ自体は『チャクラム』という投擲武器である。CDではありません。

使用者は、所有者でもあるゴーシュのほか、ラグとレナが選ばれた。頭数でいえば、倒すべきゴーレムと等しい。

扱えそうすか？ と訊いた峻に、ゴーシュ以外の2人は難しそうな顔をした。2人の手の上では、おぼつかない様子で浮き上がった円刃が、くるくると緩やかな速度で自転している。なんとなく、峻はむかつきを覚えた。

しかし、秘策と呼ぶには心細い。『魔導具』などというから、つきり炎やら電気やら何とかエネルギーのビームやら、何かそんな感じのものがぶわーっと出るのかと思っただのに、と峻は心の中でつかりした。この男、魔導具に何を求めているのだろうか。

「リョウくん、今不謹慎なこと考えてません？」

「そんなわけないでしょ何を悠長なこと言ってるんすか」

「いやキミに言われたくな」

「はいはい聞こえない。それより、そんなのでホントにあれを倒せるんすか？」

「こんの……ッ！ ……………ま、まあ、それはいいとして。こつち来てください」

勝った。ざまあ。

などという意味不明な感慨はともかく、峻はラグに言われるまま窓の傍に寄った。「首のあたりを見てください」と言われたので、その通りゴーレムの1体を　むかつくような不快感が再発したが、なんとか我慢した　見る。

首が短いので分かりにくいのが、全身を覆う鈍色にびの甲殻がなく、くすんだ灰色の肌が覗いている。

「ゴーレムの甲殻を破ることはできませんが、首や関節には小さな隙間があるんす。ま、首筋が唯一の急所っすね。あそこを狙えば一発っす」

「……………それ、結局難しいのは変わらないんじゃないすか？」

「さあ？　弓で射るより楽なんじゃないっすかね」

「目が泳いでますけど」

「ななな何のことっすかねえ」とあからさまにたじろぐラグを無視して、峻はもう一度ゴーレムのほうを見やるが、その足元に、周

りの賊共とは何やら雰囲気の違い者がいることに気付いた。周りの者たちと同じ黒装束ではあるが、袖や裾が不必要に長い。何か胸元でちらちらと光っているが、それが鏡のようなものと気付くのに、少し時間がかかった。呪具の類だろうか。

「ラグさん、あいつらは？ あの足元の」

「足元……ああ、ありや使役術師っス」

「使役術師？ ゴーレムを操ってるってことすか」

「そっス。……しかし、あいつらを従えることができるとなると、相当の実力者ってことなんでしょうか……」

（ていうか、先にあいつら撃つときゃいいんじゃないの？ 駄目なんだろうか）

ふと浮かんだ峻の疑問は、カルドクの声に掻き消された。

「とにかく、ソイツを使える3人がゴーレムが仕留めたのと同時に、オレ達が一気に突っ込んで、そのまま連中を仕留める。

ゴーレム共は、できれば連中が油断してる初撃でオとしておきてえ。お前ら、頼んだぞ」

「はい！」

「善処する」

「り、了解っス」

1人、やや上ずった声で答えた。大丈夫だろうかこの人。

「そろそろ『約束』の半刻だ。いくぞ！」

作戦を実行すべく、それぞれが応接室を出る。

嫌な予感しかしないなあ、と峻は他人事のように思った。

魔導具によるゴーレムの狙撃は、屋内で最も『標的』に近い位置で行う。合図と同時に三人が一齐に魔導具を射出し、ゴーレムを仕留めたのと同時に団員達による突撃、という手筈になっている。峻は食堂にて、ラグに同伴した。この短い時間で大分練習したらしく、ほとんど自在に使いこなせるようになってる。が、狙い難いのは変わらない。

「あ、号令はリョウくんがしてくださいね」

「ういす」

峻たちの傍には、6人の団員が控えている。自分よりずっとベテランの彼らに命令するのは少し緊張するが、まあ合図をするだけだから気にすることもないだろう。

峻たちは窓際に隠れ、賊共を盗み見た。こちらの挙動に気付いている様子はなく、ゴーレムも相変わらずピクリとも動かない。

「そろそろつす。……やれます?」

「やれるかやれないかって言われたら　ま、やるしかないでしょ」

「ですよねー」

その時。

爆竹の乾いた音が、砦内にこだました。

「きた!」

「了解!」

ラグが素早く窓に直面し、魔導具を射出した。ぎゅんと風を切りながら、神速の円刃がゴーレムに向かって飛んでいく。

結果からいえば、ゴージュとレナは見事、ゴーレムの急所に命中させた。

ゴーレムの頸くびから赤黒いものが噴き出したのを確認して、カルドクは真つ先に飛び出した。従う団員達には黙ってついて来いと事前  
に言っているもので、特に合図も号令もしない。レナは安全のため、  
岩内で待機してもらっている。

カルドクたちの目の前の賊は7人ほど。どうと倒れるゴーレムに  
混乱しているが、伊達に軍の捜査を潜り抜けて、破壊活動をしてい  
る集団ではないだろう、すぐにこちらに応戦してきた。奥にいる使  
役術師らしい者を除き、どいつも妙にすばしっこい。どちらかとい  
うと、ゴージュのように密偵や暗殺を生業としている者たちの動き  
である。重い大剣を扱うカルドクにとって、1番苦手なタイプだ。

だが、伊達に大剣一振り  
で戦場を切り抜けてきたカルドクではない。上手く間合いを乱し、隙ができたところを素早く両断する。脇

にいたもう1人を斬り捨てたところで、ギーン！ という甲高い金属音が聞こえた。何かと振り向きざま、カルドクは戦慄した。

ゴーレムの赤黒い眼が、カルドクを捉えた。

（失敗か！？）

どっちだ！？ ゴーシュ いや、アイツは使いこなしてるはずだ。となるとラグ あのバカ、肝心なときにへたれやがって！）

ずん、とゴーレムがこちらに歩み寄る。どうする と一瞬パニックになりかけたカルドクの視界に、白髪の少年が飛び込んだ。峻である。

「すみません、失敗しました！」

「ラグたちは！？」

「ゴーシュさんたちの方へ！ とりあえずゴーレムは一時放置して、こいつらを片付けてから相手するとのことっす！」

「そうか、それでい」

「お……おい、ゴーレムじゃねえかよ！」

2人は声がしたほうを振り向いた。団員の1人がゴーレムのほうを見て、棒立ちで震えている。

ゴーレムがまた一步、こちらに近付いた。

「ど、どういうことだよ!? ゴーレムは倒してるんじゃないのかよ!? どうすんだよあいつの相手なんて!? 聞いてねーよこんなの!」

また一步。峻たちとの距離は、もはや30mもない。峻は腰の刀に手をかけながらも、その巨軀を呆然と見上げるしかなかった。

「まだどうにかなる! 今は目の前の相手に集中しやがれ!」

「い……いやだあつ! 死にたくねえ!!」

圧倒的な脅威を前に、人の心はひどく脆い。

カルドクの声も届かず、団員は頭を抱えてがたがたと震えだした。

「いやだいやだいやだ死にたくねえ! 死にたく ぎゃひいつ!」

「……つな……! ロツツ、おいロツツ! ぐあつ!」

ずん、と、そんな重い音が聞こえたように、峻は思う。

泣き喚く団員の背中に、賊の放った矢が突き刺さった。駆け寄るもう一人を、また別の賊が斬り伏せる。

1人、また1人。迫り来るゴーレムに萎縮しては、賊の手にかか



術師はソレの存在に気づいた。

辺り一帯の賊を両断し、カルドクはふと峻のほうを向いた。

「バカ、やめろ!!」

「えっ!?!」

はっと青ざめたカルドクが叫ぶが、時すでに遅し。

峻の短剣が呪具を貫き、術師の腹部に突き刺さる。ぱりんという澄んだ音を残し、呪具の破片が飛び散った。

峻が事務室に戻ってくる、少し前のこと。

『なあ、あの術師を先に仕留める事は出来ねーのか?』

『無理だ』

何気ないカルドクの疑問を、ゴーシュは即答で切り捨てた。

『即答かよ……何でだ? 操ってるあいつらを先に潰しときゃ、連中もやりにくくなるだろ』

『確かに、連中の利にはならないだろう。むしろ、それが問題だ』

『はあ？』

『イシマエルを使役するとは、「思い通りに操る」ということではない。奴らを「束縛」し、己を「傷つけさせない」ようにする、ということだ。ならば、使役された状態のままゴーレムを仕留めた方がいい』

『どどういう意味スか？』

『奴らは使役されている限り、連中の損にならぬ動きを取らせ続ける。それは奴らの行動パターンを特定することができるということであり、仮に「作戦」が失敗した後も、仕留める機会は充分にありうる。』

だが万一、連中の束縛から逃れることがあれば　もはや、我々の手には負えないだろう。

奴らはヒトの脅威だ。敵も味方もなく、目に付いたヒトを片端から殺し続ける』

がくん、とゴーレムの顎が軋んだような気がした。



ゴーレムの口がぱっくりと開き、劈くような咆哮が轟いた。

「んぎっ!?!」

予告のない音の暴力に、峻の耳が悲鳴を上げた。敵の眼前にいることも忘れ、彼は反射的に耳を塞いだ。あと1秒遅ければ、鼓膜をやられていたかも知れない。

やばい。

やばいやばいやばいやばいやばい!!

まさに「ヒトの天敵」にふさわしいその姿に、峻の本能が最大音量で警鐘を鳴らす。無意識に後ずさりする峻の耳に、カルドクの声など入らない。

幸運にも（あれは本当に僥倖に過ぎなかったと、峻は後に回顧する）、最初の標的は彼ではなかった。

「ぐっ……」

使役術師は、至近距離の咆哮に苦悶の表情を見せた。平衡感覚が狂い、それでも辛うじて意識を保っているのは、皮肉にも貫かれた腹部の激痛のおかげだった。

とにかく、逃げなければ。呪具を失った以上、もはや我が身の無事も保証できない。這う這うの体でその場を離れようとする術師を、ぐりん、とゴーレムの頸が動き、その六ツ目が男を捉えた。

「ひいッ……！」

血走ったような虚ろな瞳に、男は委縮した。さながら、蛇に睨まれた蛙のように。

あるいは、ここで止まらなければ、命だけは助かったかもしれない。

「あ、あ、あああ」

振り上げられたゴーレムの腕を、恐怖に縛られた彼は、ただ茫然と見上げる。その拳が陽光を受けて煌めき、

ぐしゃり、と。

いやな音を立てて、彼の身体を叩き潰した。

「な……」

「リョウ！ さがれっ、ぼさっとしてんじゃねえ！！」

愕然と立ちすくむ峻の眼前で、ゴーレムはぐりぐりとその拳を男の肢体に押し付ける。そのたびに、男の四肢があらぬ方向に揺れる。拳の下で見えない胴から、ごぶりごぶりと、紅い泉が広がっていつ

た。

「ごきり、という音が不意にした。片脚がゴーレムの拳から離れ、ごろんと峻の方に転がってくる。血の気が無くなり青白い脚は、先程まで命の一部であったようでなく、マネキンの一部かゴムの塊のように見える。その脚は膝から上が無く、ひねり潰された断面から垂れる血が、そこから僅かに覗く白いモノだけが、肉塊であることを主張している。峻はそう感じた。

何かが、ぷつりと切れたような気がした。

ゴーレムは、ただの肉塊と化したソレに興味を失い、新たな獲物を求めて首を巡らせる。だらりと頭垂れた峻には目もくれず、ゴーレムの眼は砦の一角を捉えた。

まずい！ カルドクは焦燥に駆られた。あそこには、レナがいる。

ゴーレムが片腕を振り上げた。

「レナ！ そこから逃げろおおッ！！」

カルドクの叫びに、レナが何事かと窓に駆け寄った瞬間、

振り払われた片腕が、その一角を薙ぎ払った。

「きゃあああああつ!!」

砦の外壁が、粘土細工を叩き割るかのように崩れ飛ぶ。瓦礫の濁流の中に、レナがいた。

「……レナ？」

ふと、峻はそちらを向いた。もうもうと立つ粉塵の中に、瓦礫に埋もれたレナの黒い髪が見える。気を失っているらしく、ピクリとも動かない。それを覗き込むゴーレムの姿も目に入った。

またひとつ、切れる音がする。

峻はもはや考えることをやめた。

「くそっ!!」

ゴーレムの赤黒い目が、レナの姿を捉える。カルドクはほぼ反射的に駆けだした。

走る。ヒト一人に何が出来るわけでもないのに。

ゴーレムが、その腕を再び持ち上げた。

走る。オレの足はこんなに鈍かったのだろうか？

肩が上がり、その巨腕が最高点に達した。

走る。カルドクは大剣を投げ捨てた。

その拳が、少女めがけて急降下する。

走る。走る。届かない

カルドクの傍を、白い影が駆け抜けた。

「……………あ？」

唐突に、ゴーレムの肘関節から、赤いモノが噴き出す。

一同、何が起こったか分からなかった。当のゴーレムさえ、呆然と己の腕を見下ろし、起こった異変を不思議そうにしている。痛みを感じているようには見えなかった。

いや、間近にいたカルドクだけは、その全貌を辛うじて知ることができた。到底、信じられるものではなかったが。

『峻が己を追い抜き、ゴーレムの甲殻の隙間を剣で刺して引き抜き、そして間合いを取った』。

言葉でいえば簡単なことだが、この一連の行為を一瞬で行うことが、果たして可能だろうか？答えは否である。

できるとすれば、それは人間ではない。

そのゴーレムの眼前に、ヒトがいた。その手に握る刀を二、三度軽く振る。赤い飛沫が、ぴっぴつと飛び散った。白い髪をガリガリと掻きながら、彼は薄笑いを浮かべていた。

峻である。

「グオオオオオオオオ！」

「あー、うるせ」

だしぬけに割り込んだ新たな標的に、ゴーレムが再び吼える。至近距離の威嚇にも峻はまるで動じず、刀を肩に担いでけらけらと涼しげに笑った。

その態度に苛立ったのかどうかは知らない。あるいはそんな感情はないのかも知れないが、ゴーレムはその腕を横薙ぎに振るい、峻を打ちのめした。その剛腕が峻を捉えるその瞬間まで、そこにいる誰もが、そうなると思った。

刹那、峻の姿が掻き消えた。

「は ！？」

カルドクが驚愕したのは、そんなイリユージョンを目の当たりにしたからではない。少し顔を上に向ければ、峻の姿を認めることが出来たのだ。

高く　ゴーレムの頭上の中空に、彼はいた。

どうして、アイツはあんなに高く跳んでいるのだろうか？

どうして、いつまでたつても落下しないのだろうか？

どうして、ゴーレムの方が下に見えるのだろうか？

超展開と驚愕の連続で、カルドクの脳髄は麻痺しかけている。

啞然とする傍観者をよそに、峻はゴーレムの肩にすんと着地した。ゴーレムがそれに気付くよりも速く、峻は刀を脇に構え、

『魔』を滅ボせ

ゴーレムの小さな頭を斬り落とした。

おびただしい量の血が噴き出し、峻の全身を紅く汚していく。脳髄の命令を失いどうと倒れた巨躯の上から、峻はぴよんと軽やかに飛び降りた。とめどなく溢れる血の海のただ中で、峻は全身を朱く染め、ごろりと転がったゴーレムの頸を蹴飛ばして遊んでいた。

「ひっ……引き上げるぞー！」

ゴーレムの後方　生き残っていた賊の1人が、そう叫んだ。ゴーレムを失った彼らに勝機はない。王女の確保もままならぬ今、もはや逃げる以外の道は残されていない。

一刻も早く、あの化物から逃げなければ。賊たちの思考は、その1点で統一されていた。

「あっ！　この」

「よー、どこ行くの？」

それを追おうとしたラグは、思わず腰を抜かしそうになった。逃げようとした賊の1人の肩を、峻がぼんと叩いたのである。

ラグはゴーレムの亡骸を見た。そこから賊の位置まで、目測でおよそ40mはある。この距離を、今の一瞬で移動したというのか。誰の眼にも留まらずに？

ラグは戦慄した。化物だ。  
あれは化物だ。

「ひっ……！？」

「なあに？　逃げようとしてたの？」

恐怖のあまり腰を抜かした賊を、峻はきやらきやらと嗤いながら見下ろした。他の賊たちも、足が凍りついたように動かない。いや、動けないのだ。限界を超えた恐怖が、彼らの脳を麻痺させていた。

「ちょっと無責任じゃない？ あんなモノ連れてきといてさあ」

「た……助け……」

「ごめん、それ無理」

辛うじて絞り出された懇願を、峻はばつさり切り捨てた。刀をくるくると弄びながら、その顔に張り付けたような薄笑いを浮かべている。その眼に映る底知れない気味悪さに、彼は身震いを覚えた。峻が刀を構えなおした。その手をゆっくりと頭上に掲げ、

『魔』 に 与ユ す ル も 亦マ タ 『魔』

賊の頭蓋を叩き割った。その額から鮮血が吹き出し、彼はどごと倒れる。

「ひいッ……ぎゃあッ……！」

そこから先は惨劇だった。

やっとの思いで脚を動かした1人の逆袈裟ぎゃくげさに断つ。返す刀で別の1人を両断する。

喉笛を裂く。心臓を貫く。頭蓋を割る。腕を斬り落とす。

その全身に朱を浴びながら、  
炎の如く紅く輝く瞳を揺らめかせながら、峻は次々と死体を生む。

やがて、全ての賊が血の海に沈んだ。

「…………マジっスか…………」

その惨状を前に、ラグが呆然と漏らした。

そして吐き気を覚えた。彼とて傭兵団の参謀であり、戦場には馴れている。戦場は血と汗と泥にまみれて汚いし、勝利に酔いしれるほど気持ちのいいものではない。かといって、センチメンタルになれるほど繊細でもない。

だとしても、この光景はあまりにも凄惨だった。

先程までの狂気と違って変わって、今の峻は実に穏やかだった。手持無沙汰に刀を弄び、手近な死体を蹴飛ばして、退屈そうな表情をしている。玩具を取り上げられて不機嫌な子供のようなだった。

峻が突然欠伸をした。一同が目を疑ったのは、もはや語るに値しない。信じられない、と誰かが呟いた。この地獄の前に、それも自分で作っておきながら、どうしてそんな貌かおができるのか。

化物だ。もはや何度目になるかも分からず、彼らは戦慄した。

峻が、唐突に刀を投げ捨てた。傭兵たちが一斉に身構える。

何事だ。戦意がなくなっただのか。安堵していいのか。油断させるつもりじゃないのか。次は俺たちか。もはや彼の行動を、自分た

ちの常識に当て嵌めることはできなかった。

油断ならぬ彼らの視線の中、

いきなり、峻の身体がぐらついた。

根元から支えを失ったように、その体が折れ曲がるように倒れる。ばしゃりと紅い飛沫が飛んだ。

「お……オイ、大丈夫か!？」

やや遅れて、カルドクが状況を飲み込んだ。慌てて駆け寄り、その肩をゆすってみる。返事がないが脈はあるため、気絶しているだけだろう。怪我は見当たらないが、頭から血を被っているのによく分からない。いったい何があつたんだ。と首をひねりながら、カルドクは手近にいた団員を呼びつけて、峻を皆内（もちろん無傷の場所だ）に運んでやった。

「まさか、『器』か……?」

「ゴーシュさん、何か言いました?」

「いや、こちらの話だ」

ゴーシュが何か言ったような気がするが、ラグは追及しなかった。それよりも、この膨大な死体の処理を考えなくてはならない。

なにせよ、我々は勝つたのだ。そこから先のことを考えなければならぬ。

彼らから少し離れたところに、ジャンはいた。これはアタリかも  
知れない、と呟いたその声には、誰も気付かなかった。

08・(後書き)

月末って何か意味もなく焦るなあ。  
どうも、名無しだけど権兵衛です。

今回はまさかの9,000字。空白・改行含むと10,000字オーバーです。長えよ。

ちょうどいい処で切っても良かったんですが、さんざん次は戦闘次は戦闘って言っというこれ以上引張るのもなあ……と思ったのでそんな理由か。

まあ正直、ここまで長くなると思ってなかったのが原因です。計画性ゼロ。

本題に入るまでの前置きでなぜかダラダラやっちゃうんですよ。  
まあ、書くべきことは全部書いたつもりです。

……そうだよね。誤魔化しても仕方ないよね。

すいませんっしたあああああ!!! (スライディング土下座)

って痛っ！？ これ予想外に痛っ！？

く膝を擦りむいて悶絶中 しばらくお待ちくださいく

……はい、失礼しました。

開口一番であれですが、少し言い訳を。

(いろんな意味で) 読者への裏切りに定評のある私ですが、今後こ  
こまでのグロ描写は出てこないと思います。

残念ながら反教育的な描写は今後も(たくさん)出るかと思いますが、  
流石に今回よりはソフトな展開になる予定です。ナニかの首が  
飛ぶことはもうありません。

ただ、読む方によっては非常に不快感を催す作品になるかと思われ  
ますので、この回で気分を害された方は、今後この小説を読まない  
ことをお勧めします。

拙作を多くの方が読んでくれるのは有難いのですが、やはり読者の  
皆様が楽しんで頂けるのが一番ですので。

では、次回までしばしお待ちくださいませ。

強い頭痛で目が覚めた。

眼に映ったそれは、むろん見知った天井である。頭痛のせいかまだ寝惚けているのか、横になっているはずなのにちりちりと眩暈めまいがする。

ずきずきと脳髓さいなみを苛む痛みと格闘しながら、峻はゆっくりと体を起こした。数人の団員と相部屋なのだが、皆出払っているらしく、部屋には物音一つしない。関節を動かすたびにぼきぼきと音がするし、全身がだるくて起きるのが辛い。まあ、寝起き爽快だった経験はあまりないが。

起き上がった拍子に毛布がずり落ちた。何ともなくそれを見やっただ峻は、己の眼を疑った。

レナがベッドに 正確には、峻の太腿あたりに突っ伏していた。血流止まるだろ何してんだこのやろうと罵倒しそうになったが、どうやら寝ているらしく、肩を僅かに上下させながらすやすやと寝息を立てている。どうでもいいことだが、寝ている人間が口をもごもごさせるのは何故なのだろう。どうでもいいことだが。

( で、どうしたらいいんだ、これ )

途方に暮れていた峻は、ふと鼻につくような臭いに気付いて、己の手を嗅いでみた。

錆びた鉄のような不快な臭い 血の匂いだ。体に血はついていないが、おそらく返り血を拭き取られただけだろう。臭い自体は、

その皮膚に染みついてしまったに違いない。よく見たら服を替えられていた。

そりゃ、頭からあんなに血イ被りやなあ。峻は他人事のように納得した。

懊悩のひとつくらいはあると思っていた。

苛むように、殺戮の残影がフラッシュバックするか。現実から逃げるように、その記憶に蓋をするか。

どちらかはあるかと、それくらいの繊細さはあるかと、どこか期待していた。

俺は間違いなく、彼らの命を否定し、そして根こそぎ奪ったのだ。許されるとは思っていない。正当化できるとも思っていない。

なのに

峻はもう一度レナの寝顔を見下ろした。人殺しの膝元に体を預けて、安らかな寝顔を浮かべている。

レナを起こさないようにベッドを抜けると、その肩に毛布を掛けてやり、静かに部屋を出て行った。水浴みがしたいな、と独りごちた。

神宿ル剣：09

「すみません、寝坊しましたー」

「冗談のつもりで言ってみたが、事務室の空気がさあっと凍りついたのを見ると、どうやら失敗だったらしい。」

「お……おっ」

「た、体調はどう……っスか？」

腫れ物にでも触れるような扱いだ。この程度で、いちいち傷付きはしない。おかげさまで、と峻は適当に答えた。

「……ゴーシュさん、まだ居たんすね」

まあ俺の言えた台詞でもないんだけど、と心の中で付け加えて、峻はカルドクの向かいに座るゴーシュを見た。非難しているようにも聞こえないことはないが、当のゴーシュは眉一つ動かさない。やっぱり胡散臭い男だ。どうして彼を否定的に見るのか、実のところ峻にもよく分からない。ただならぬ人物であることは間違いないので、それ以上の理由には興味ないが。

「事後処理を手伝っていた。王女殿下のことも気にかかる」

「事後処理、ね……………いや、お手数かけました」

厭味と受け取ったのか、ゴーシュは特に返事をしなかった。こればかりは本音だったのだが、日頃の行いが悪い所為かもしれない。峻は心の中で嘆息した。

原因がどうあれ、あの惨状を作ったのは俺なのだから。

「ときに『王女殿下』ってのは、レナのことですか？」

「そつだが」

「ふーん……何か、ピンとこないなあ」

これって不敬罪かな、と峻はふと思った。気にしているわけではないけれど。

『レナ』も『王女』も、彼女を表す記号の一種でしかない。それが彼女の本質を成すことはないのだけれど、『王女』という記号をフィルター意識するたびに、ゴム袋を被せられたような不快な違和感を感じる。峻にとって彼女は『レナ』でしかなく、存在すら知り得ない雲の上の人ではないのだ。

だけど、と峻は自問する。

俺にとって、何が彼女を彼女たらしめているのだろうか？ 記号ひとつで曖昧に歪んでしまうような、希薄で空疎な要素をもって、俺は彼女を認識しているのか？ そもそも彼女の本質を、その一端でも知り得ているのだろうか？

己の本質さえ、定かでないというのに。

「ピンとこない？ 彼女が殿下であることは事実だろう」

「イヤ、そうなんすけどね……あの能天気なのが頭から離れないっていうか」

「能天気って……」

ラグが呆れたように呟いた。何となくそちらを見やると、ラグはしまったとばかりに慌てて目を逸らした。

口を挟んでくるくせに、向き合うこともできないのか。峻の中で、黒い感情が顔を覗かせた。

「その、王女殿下についてだが。君に話しておきたいことがある」

「へ」

予想だにしない展開がゴーシユによって紡がれたため、峻は思わず間拔けな顔をさらした。『王女殿下』ことレナの扱い 傭兵団じたいの進退を左右しかねない事柄なのに、たかが一団員（以下）に話すようなことがあるのだろうか？

話を続けて貰うつもりでゴーシユの方を向いたが、彼はそれ以上話さず、カルドクに目配せをした。ココの代表者として譲ったのだろうが、肝心のカルドクは急に水を向けられたことに戸惑い、峻と目を合わせては慌てて顔を背けた。

この人、意外と肝が小さいよな。長くなりそうなので峻は空いている椅子に腰かけた。面倒なので一同には断らない。

「あー……レナ じゃねエや、王女サマの話なんだがな、素性も分かったことだし、そろそろ送り届けようって話になってな。領主ンところに押し付けるのが手っ取り早いと思っただが」

「領主の手にも余るんじゃないすか？ 状況次第だところらが変に疑われるかも知れないし」

「お……おう、そうだ。だから、直接王都まで護衛することになつてな」

「へー。」

「……ゴーシュさん、今何か言いました？」

「いや。続けてくれ」

ゴーシュがこちらを見たような気がしたが、すげなく躲された。そんなにおかしなことを言っただろうか？

いつの間にかラグも話に参加していた。

「仮にも王女だし、道中何かあったらマズいんで、団をあげて護衛をしようかと思っただんスけど、ゴーシュさんの提案で、最低限の人数で護送することになったんス」

「大丈夫なんすか、それ」

「昨日のあの騒ぎがあった以上、団のあらゆる挙動を、さまざまに人間が観察しているだろう。ここで団が長く皆を空ければ、事の重大さを感じて飛びつく人間が必ず出る」

「じゃあ、身動き取れないってことすか」

「そのために、普段の依頼と変わらない人数で護送する。隠し果せることは難しいが、団じたいが平常通り運営していれば、誤魔化し程度にはなるだろう」

「……そういうもんすか」

ふーん、と峻は適当な相槌を重ねた。さて、問題はその人員だが。カルドクが先を続けようとしたところで、部屋の扉がガチャリと開いた。むー……と眠たげに唸りながら、レナが入ってくる。その肩で、毛玉が鼻ちようちんを膨らませていた。鼻あつたのかお前。……いや、あつて当然なんだが。

「おはよー……」ごぞいます……」

「お、おう……」

(ちよ……団長！)

「あ？ え、あア……オ、オハヨーゴザイマス」

寝ぼけ半分のレナを相手に、カルドクとラグはぎこちない様子で答えた。本人は特に気付いていないようだが、昨日とは随分な変わりようだ。

気持ちは分からんでもないが、しょーもない連中だよな。峻は冷淡に切り捨てた。冷ややかな空気に気づかないのか、レナはこしこしと目を擦りながら峻の隣に座った。

「おはよー……リョウ」

「ハイおそよーさん。つーかまず顔洗えよお前。」

「だいたいさっきのアレ何？ あそこで何してたの」

「リヨウガー、起きないからー……心配でー」

「……………そう、かい。そりゃどーも」

(……………ちょっと、リヨウくん)

ラグが恐る恐る小声でたしなめてきたが、峻は無視した。あんたが言っても白々しいだろ、と峻はつつけんどんな態度を崩さない。

何だかんだ言っつて、俺も人のこと言えねーなあ。峻は内心で自嘲した。

「あー……………、あ、そうだ、レナ……………様にもお話ししないといけないっスね。護送の件なんスけど」

「護送……………ですか？」

「昨日話し合っただがよ、あんたは王都　つまり、国王……………ご夫妻？　両親ンとこに帰るのがいいっつーことになってな、……………じやねエよえーと、なりまして」

「ついでには道中、我々が護衛をすることに決まったのだが」

「……………やっぱり、迷惑でしたか？」

レナが消え入りそうな声で呟いた。今にも泣き出しそうなその顔に、峻は一切の言葉をかけなかった。

迷惑か迷惑でないか、という二択を迫られれば、彼女の存在は間違いない迷惑にあたる。だがそれは断じて、彼女が迷惑をかけているとか、実際に傭兵団への被害があるとかいう次元ではなく、「王女」という存在そのものが、この辺境の傭兵団の手に負えるものではないからである。本人にすれば大差ないだろうが、彼らの対応は決して拒絶の表れではない。

三者が言葉を重ねて彼女に説いているのを、峻は冷やかな目で眺めていた。

彼女は奇妙だ。王族としての誇りと気概を備え、大衆には到底得がたい胆力を持ちながら、誰かに拒絶されることをひどく怖れているように見える。出逢ったとき然り、今も然りだ。

力強くも打たれ弱い、歪<sup>いびつ</sup>な心。それが、峻にはひどく奇妙な姿に見えた。

( いや、どーだろう )

歪んでいるのは、むしろ俺だ。

俺から見た見た彼女が、果たして本当に歪んでいるのか？ 峻はその答えを持っていない。

俺は知らない。そんなこと、俺に分かるものか。

「で、その人員なんすけど」

「はあ」

レナが落ち着いたところで、ラグが改めて話を戻した。人員を誰にするかという話だっただろうか。  
何となく、展開が読めるけどな。

「ホントは自分や団長も行くべきなんすけど、ゴーシュさんに止められましてね。」

ゴーシュさんとジャンくん、それとキミにもお願いしたいんすけど……いいスか？」

(……そらきた。だから嫌いなんだよ、この人)

勘繰るまでもない。建前をいくら弄しようとして、要するに放逐ほうじゅくである。

一瞬だけ迷った峻は、ちらりとレナを盗み見た。ラグの意図を知らないらしく、きよとんと首を傾げている。そういえば「あの時」、レナは気絶してたかな、と峻は今更のように思い出した。

まあ、誰に頼ったところで、答えが変わるわけではないのだけじゃ。

「 合点です」

顔色一つ変えずに答えると、ラグとカルドクはほつと安堵した様子を見せた。そんなあからさまでいいのか。こいつら馬鹿かと思っただが、傷つきはしない。

きつと俺でも、同じことを考えた。同じことを望んだ。

ヒトは、己と異なるモノに恐怖し、嫌悪する。  
何も間違っていない。弱いヒトが、生き残るために生み出した  
反応だ。

彼らの反応は正しい。  
間違っているのではない。俺が一番よく知っているだろう？

その日の午後はルートなどの諸計画や荷造りに追われた。部屋に  
戻ってくるころにはすっかり日が暮れ、相部屋の団員たちはすでに  
床に就いていた。

この世界の夜は早い。電球や蛍光灯のような照明設備がないため、  
日没後も活動している人は少なく、夏でもリルの刻（午後8時相当）  
には皆寝静まってしまう。都市部では照明用の魔導具も流通してい  
るらしいが、高価なので一部の富裕層が所有している程度である。  
その代わりとすべきか朝は早く、ほとんど日の出と同時に起き出  
す。峻は雑用なので、それより幾分か早く起きなければならなかつ  
たが。

峻は部屋全体を見渡した。8畳程度のあちこちに、団員達の私物が所狭しと積み上げられている。何度説明しても「衛生」という概念を理解できないルームメイトたちは、汗と垢と安酒の臭いをまき散らしながら、いびきの合唱を続けている。月明かりに照らされたところで、美しくもなんともない、むしろ汚らしさが際立つ部屋だが、ここに来た当初と比べれば、それでも綺麗になった方である。ここも例によって、峻が毎日苦心しながら掃除した場所のひとつであり、設備と峻の能力を限界まで駆使して、ようやく今の状態にこぎつけた。それも3日も経てば元通りになるだろうが、本人らがまるで気にしていない以上、もはや峻が心を砕く必要などない。

明日の朝には、王都に向けて発つ。ここに戻ってくることはないだろう。

もう少し、感傷があっても良いんじゃないの？ 峻は自問した。

この2ヶ月弱、飛ぶように時が過ぎた。その間にも、いろんなことがあったと思う。

最初は、つまり向こうと特に変わらなかつた。少しして、髪をイジられ名前をイジられ、ものすごく不愉快だつた。それから軽口を叩き合える仲になり、酔っ払った奴らの介抱もしてやった。絡んできたときは（物理的に）ひっくり返したことがあつたっけ。

飲んだくれた連中からまれた時は、ちびちびと量を誤魔化しながら付き合つてやった。博打や女遊びを教えられそうになった時は全力で逃げた。煙草を勧められた時は殴り倒してやるうかと思つたし、阿片アヘンを寄越された日には全力で蹴倒した。

無知で無学で（何故か読み書きはできるけど）教養もマナーも気遣いもないし野卑で享樂的ではた迷惑な連中だけど、一緒にいて、たぶん、楽しかった。と、思う。

瞼を閉じてみる。奴らはへらへらと笑っていた。俺もたぶん、笑ってたと思う。

こういつとき、ホントは、もっと寂しがるべきなんだよな。

峻は冷静な脳裏で確認する。

峻は落ちていたサーベルを静かに拾い上げた。その柄を握っても光を放つことはなく、動悸も衝動も起こらない。

鞘から引き抜き、軽く振ってみた。ヒュツと空を斬る短い音が閃き、刀身が月光をつけて煌めく。血が固まりところどころ黒くなった刃は、しかし刃毀れはこぼれひとつしていなかった。

思うところなど何もない。手入れしなきゃな、とは思った。

恩知らずとか冷血とか鬼畜とか、非難するような言葉たちが頭をよぎる。

それらはただよぎっていくばかりで、虚しく大気に溶けていった。

今更だ。

本気で悲しんだこともないくせに。今になって、都合よく嘆いてみせるのか？

「正常な感傷なんて求めても、時間の無駄だ。」

そこで「時間の無駄」という言葉が出てくるあたり、実に俺らしい。

ふと、峻は己の手を嗅いでみた。不快な鉄の臭いはまだ取れない。

今回はお喋りだけのはずだったのに、まる1ヶ月掛かっちゃった……  
どうも、名無しだけど権兵衛です。

というわけで、今回は『王都へ行こう！』計画編』でした。(嘘  
こけ

その割に計画立ててる描写が一切なかったがなに、気にすることは  
ない。

前回テンションが(ヤバイ方向で)やたら高かったので、そこから  
の落差がひどかった……

尺というか構成もいまいち決まっていなかったもので、どこまで書いた  
もんか迷いながらちびちび進めておりました。だからちゃんとプロ  
ットを練ってから作れとあれほど(r y

で、いろいろ迷ってるうちに、「これは峻の心理描写も入れてない  
と手抜きじゃね？」とふと思ひ、端々に突っ込むことにしました。  
みずから墓穴掘ったんですね分かります。

その結果が主人公による厨二病丸出してどういうこと？(ええー)

しかし心理描写って難しい……(みんな知ってます)

しかも峻がとんだひねくれボーイ(？)なので、いちいち言葉を  
ひねってやらにゃならん。

どうして処女作からこんなに面倒臭い話にしたんだ！？

……センスがないからですね。そうですね。

『王都へ行こう!』は次回で終わると思います。みじか。  
ただ、そこから先がちよつとごたごたしてくるので、都合によってはかなり短くなるかもしれません。でもたぶん1ヶ月掛かるけど。  
別にどうでもいい? 知ってる (えー)  
あ、とかキモいですよね。すみません。

というわけで、次回までしばしお待ちくださいませ。

翌朝、リヨウたちは殆ど夜明けとともに出発した。

ゴーシユの言う通り、人に見られるリスクは少ないほうがいい。歩き通して王女の体力が持つだろうかということが懸念されたが、本人はやる気満々のようだし、見た目より体力があるのはこの1ヶ月足らずでよく分かっている。

砦から王都まで、歩いておよそ4日。馬を用意したほうがいいのではないかという話が出たが、ジャンとリヨウが乗れないので却下された。人員を十分に用意できるならともかく、この人数では奇襲に対応しにくいということもある。

出発に際し、四者の反応はさまざまだった。

ゴーシユはいつもどおりの無表情だったが、団長いわく「あれでも表情豊かになった方」らしい。あの仏頂面のどの辺で判断しているんだと思っただが、よく考えたら2人の関係をちゃんと聞いたことが無い。まあ、この辺境の傭兵団が彼のような情報屋を頼ることは二度とないだろうから、特に必要があるわけではないが。

ジャンは緊張しているのか、終始そわそわしていた。プレッシャーに弱くこんな大役を任せただけではないが、やれば出来る子なので問題はないだろう。彼も王女との距離感を掴みかねているらしく、軽口を叩いては慌てて敬語に直していた。

その王女といえは、少し涙ぐんでいた。王宮に比べればオンボロに違いないこの砦だが、この1ヶ月弱で少しは愛着していただけのだろう。光栄な限りだが、それをこのように追い出す形になってしまったことを思うと、申し訳ない気持ちになる。「お世話になりました」と何度も感謝の言葉をいただくたびに、その思いは強くな

リヨウは、それを遠巻きに眺めていた。

その姿はまさしく傍観者のソレで、実に奇妙な光景だった。王女護送という大役を請け負った当事者でありながら、我関せずとばかりに砦の外壁に体を預け、王女の様子を風景でも眺めるかのように見守っていた。

よほど長く見てしまっていたのか、視線に気づいた彼がこちらを向いた。顔を隠すように被せられたフードの下は、しかし緊張感の類、感情らしきものさえ碌に見出せなかった。くすんだ灰色の瞳は、どこに焦点を合わせているのか分からなかった。

最後まで、何を考えているか分からない子だった。

たぶん、出会ったときから嫌いだったと思う。

神宿ル剣：10

「意外すね」

「何がだ」

「団員でもないのに、こんな仕事を引き受けるなんて」

一同はリテ街道を南西に下り、中央天領（王都周辺の王府直轄地）に入る。中央天領までは旅籠が無いため、はじめの2日間は野宿を挟んでの歩き通しである。

ノルタの刻（正午）になり、一行は街道の脇で3度目の休憩をとった。空にはぎらつく太陽が輝き、砂利道をじりじりと焦がしている。もうすぐ夏だろうか。

峻の何気ない一言に、ゴーシュは静かに反問した。

「何故、そう思う」

「イヤ何故って……たまたま居合わせたとはいえ、当事者でもないのに首突っ込むほど、お節介にも見えませんか？」

「そうか」

（……『そうか』で流しやがったよこいつ）

峻の正直な評価に短く答えると、ゴーシュは水筒の水を口に含んだ。他に言うことねーのかよと不満を抱く峻の横から、ジャンとレナが話に入ってきた。毛玉は峻の手にあった干し肉をかじり取り、美味そうな顔をしながら咀嚼していた。どうして俺のを食うんだこ

の野郎。

「リョウウってさあ、何かやたらゴシユさんに突っかかるよなー」

「うん、私も思った。どして?」

「どしてもへったくれもあるかい。あんたらと違って、初対面でホイホイ仲良くなれねーの、俺は」

「そうだよな、団に来たばっかの時とか、めっちゃめっちゃ暗かったもんなー!」

「やかまし」

ハハハとからかうジャンを小突くと、峻はすっかり小さくなった干し肉(ほとんどはムルムルが食べた)を一口で食べ、ろくに噛まないまま飲み込んだ。ついでに、乱れたフードを深く被りなおす。

「でも、確かに意外だなあ。オレも、もっと冷たい人だと思ってたっす」

「そうだろうな。事実、カルドク団長からの頼みでなければ、表立つての護衛は断っていたかも知れない」

「へ」

「私は以前、ヴァルク傭兵団に所属していた。団長とはその頃から

の縁だ」

「マジっすか？」

「そうだ。もつとも、彼が団長に就く以前に脱退したが」

意外だった。というより、ゴーシュがあの傭兵団の一員として戦う姿が想像できなかった。

峻ほどの敵意を浴びることは少ないだろうが、ゴーシュは常に人を寄せ付けない雰囲気纏っている。職業柄といえばそれまでなのかもしれないが、見る限り相手の身分や立場にかかわらずあの態度をとっているあたり、おそらく素でそういう性格なのだろう。そういう人間が、団体行動や連携を重視する傭兵団でやっていけたのだろうか？ まあ、カルドクあの態度を考えると、それなりにうまくやっていたのかも知れない。

そんな告白に驚く一方で、峻はどこか納得していた。明らかに性格が合わなさそうなカルドクが、あれだけ親しげにしていたのである。浅からぬ因縁があるのだろうとは、薄々感づいていた。

「じゃあ、お二人はかつての戦友ってことですか？」

「そのようになる」

「わー、かつこいいー！」

(……アイツは傭兵の世界に何を求めてんだ)

(わ、わあ……)

ゴーシュの意外な告白に、レナは妙に盛り上がった。約2名は完全に置いてけぼりだが（ゴーシュはおそらく聞き流している）、大方、何かの英雄譚と重ねているに違いない。傭兵稼業に栄光も華やかさもないのは、この1ヶ月でよく分かっているはずだが……「王様もこんな感じだったらイヤだよな」というジャンの一言を、峻は否定できなかった。

「でもボルツィトルガレンの調査では報酬の話も出てましたよね？」

「当然だ。団長は、昔馴染みである以前に依頼人クライアントだからな」

「……さいですか」

きつちりした男である。

「まあ、それを言ったらオレたちも、　　と」

口を開きかけたジャンが、不意に口をつぐんだ。どうしたの？と訊くレナには答えず、木立のほうをじっと睨む。峻とゴーシュも気づいていた。

ざわざわと草を踏み分ける音が耳に届く。果たして、足跡の主が現れた。

( 狼？ ……違う、魔物か )

体格は大型犬とあまり変わらないが、四肢や銅など全体的に細い。銅色の逆立った毛は針のように鋭く、余すところなく敵意を纏っている。そのところどころから蒼い突起が突出し、峻の中で『動物』との明確な一線を画していた。骨格の一部かな、という疑問が峻の脳裏をかすめた。

ひゃ、とレナが小さい悲鳴を上げた。見ると、最初の一頭の脇から同じ連中が続々と現れる。

集まったのは9頭。低い唸り声が合唱のような様相を呈している。

「何だ、こいつら」

「縄張りを荒らされて怒ってる……とか？」

数頭の齒の隙間から、白濁した唾液がこぼれた。

「……じゃ、なさそつすね」

「ところで人間って美味しいんだろうか。雑食だから臭みとかキツそうな気がするけど」

「そついう問題ではないと思うが」

何やら緊張感のないやり取りがなされた。

しかし全員の意識は、既に戦闘時のそれであった。ジャンは腰の短剣に手をかけ、レナも非武装ながら身構えている。一方、ゴースユは得物を構えてはいなかったが、情報屋という職業柄、特殊な闘い方なのだろう。適当に思考を切り上げつつ、峻も背負ったサーベルの柄を握った。

「ジャンは殿下を下げて安全の確保を。」

君は、私と共に奴等の撃退だ。深追いは無用、痛めつけるだけでいい」

「ういす」

「了解つす」

先頭の1頭が低く身構えた。ジャンがかばうように、レナの前に立つ。

魔物が跳躍した。狙いはまっすぐ、峻の喉筋。奇妙なほどに整然と並んだ牙が、峻の眼前に晒された。

刹那、峻の右脚が空を切る。

峻の爪先が魔物の顎にめり込み、ギチギチと骨が音を立てて軋む。強く蹴り上げられた魔物は、キャウンと仔犬のような情けない鳴き声をあげながらもんどりうった。

反動で後ろに傾こうとする身体に合わせ、峻は踏ん張ると共に大きく振りかぶる。今度は重力に従い、峻の身体が前のめりに倒れた。

その勢いに乗せて、峻は刀を叩きつけるように振り下ろした。

白刃が魔物の肩口を深々と斬裂き、吹き出た血で紅く染まる。魔物がどうと倒れるのを待たず、峻は右手に新たな標的を求めた。その視線の先に、2頭の魔物がいた。

「ジャン！」

跳躍する2頭の標的を理解し、峻は短く叫んだ。一方は先のものと同様に牙を突き出し、他方は鋭利な爪を振りかぶっている。

ジャンの後ろにはレナがいる。彼女を庇ったまま、2頭を捌くことは無理だ。一瞬の判断で峻は体を翻し、片割れの背後を取るべく踏み込んだ。

しかしそれは、結果的に杞憂であった。

「ふッ！」

短剣が閃く。

その刃が魔物の爪を受け止め、同時に繰り出した回し蹴りが他方の顔面にめり込んだ。目を潰したらしく、魔物の悲鳴に合わせて、ぐしゃっといういやな音が木立に響いた。

そこに生じた2体の隙をジャンは逃がさない。短剣を両手に構えると、ジャンは独楽のように体を翻し、

「おらよっしとー！」

2体の喉を斬り裂いた。

魔物たちはなす術もなく地に臥し、草むらに紅い血だまりを作った。ヒクヒクと痙攣けいれんしているところを見ると、まだ息があるのかも知れない。えげつない殺し方だと峻は思ったが、本当の意味で「一瞬で息の根を止める」ならば、一撃で頭蓋を粉砕するぐらいのことをしなければならぬし、現在の状況を考えれば無理な相談だろう。脚を叩き折って生かすよりマシか、と峻はどこかズレた思考を回していた。

が、当のジャンはそんなことお構い無しに後ろを振り向くと、

「見た？ 見ました今の？ 今のオレかつこ良かったすよね！」

「え？ あ、うん、あはは……」

「きゅー」

「やったー！ 聞いた？ なあ聞いた？ オレ王女様に誉められたよー」

(……心配して損した)

やたらはしゃいでいた。馬鹿馬鹿しくなった峻はため息をつく。だいたい、自分が心配するようなことなどないのだ。ラグ達に重宝されているだけあり、ジャンはなかなか器用な奴で、諜報・偵察はもとより戦闘にも秀でている。カルドクのように敵をまとめて一掃することはできないが、味方と連携しながらの戦闘が得意で、複数の敵を引き付けながら軽くあしらうことなどお手のものだ。まし

てやこんな魔物相手なら、峻の出る幕など皆無に等しい。

のしかかるようなアホらしさと、無意識の安堵と一つまみの劣等感を胸に抱きながら、峻は踵を返した。

振り返った峻の瞳と、ギラつく両眼がかち合った。

(……やべ)

迂闊だった。敵はまだいたのだ。

峻は咄嗟に刀を構えたが、魔物は何を思ったか低く身構え

おおん、という咆哮が轟いた。

(このタイミングで遠吠え?)

峻がその意図を推し量る暇など無かった。

魔物の周囲の景色が僅かに揺れたかと思うと、強い衝撃が峻の体を叩いた。有無を言わせぬ圧力に抗しきれず、峻の身体は1mほど押し出される。

「ぬ おっ!?!」

痛みはない。防御だけでもできたのが幸いしてか、尻餅をつくこともなかった。

それよりも、今のは何だ？

感覚としては突風に近い。ただ威力は桁違いで、透明かつ巨大なハンマーで殴られたような衝撃である。もはや、咆哮の衝撃だの音波だの闘気が云々だのという次元ではない。

なら、今の威力はどうやって出た？ 文化らしきものさえろくに持たない生物が、身一つで撃てるとは到底思えない。

それならば今のは、いったい如何なる理の下に発生したのか？

(……………それとも)

混乱する峻の脳裏に、ふとあることが浮かんだ。

その理屈の通じなさが、『魔』物たる所以ゆえんなのだろうか？

「ガルウツ」

(……………っち！)

はっと我に帰ると、新手は既に跳躍していた。次こそ峻を噛み殺すべく、石灰色の牙を閃かせる。ゆっくり混乱する暇もくれないら

しい。

迎撃は間に合わない。短い舌打ちと共に峻は護拳を突き出したが、

「きゃうん」

「おわっ!?!」

鏢つばのないナイフが峻の耳をかすめ、音もなく魔物の眉間に食い込んだ。

魔物は糸の切れた操り人形のように、峻に覆い被さった。その重量を除けるのもそこそこに、峻がぎよっとして振り返ると、そこには3つの肉塊に囲まれたゴーシユがいた。

軽く上げた片足の踵から、血糊のついた白刃が覗いている。仕込み刀らしい。

「1体に気を取られ過ぎるな。殺して回る必要はない」

(バッチリ殺してる奴が言うんじゃないよ)

深追い無用が聞いて呆れる話である。

というか人の耳をナイフで掠めといて、何を偉そうに説教してやる!?! こちらは危うく、味方あんたの攻撃で怪我するところだったのだが。

「つか、もう居ないじゃないすか」

「そうだな」

(だから『そうだな』じゃな　ええいちくしょう！)

あまりに理不尽な(と峻は捉えた)ゴーシュの物言いに峻はブチ切れそうになったが、既に状況が変わってしまったため、煮えくり返るはらわたをやつとの思いで抑え込んだ。　過ぎたことを蒸し返してゴネてる、という構図を避けたんだ。これは屈服じゃない、戦略的判断だ。(本人談)

ともかく、魔物の撃退は完了した。もう2、3頭くらいいたはずだけどな、と峻は首を巡らせるが、既に逃げてしまったらしい。仲間がやられるさまに恐れをなしたか、戦力的に不利と判断したか……どのみち、逃げた連中がまた襲ってくることはないだろう。それよりも、この後どうするかを考えなければならぬ。

峻はゴーシュに尋ねようとしたが、彼は既に行動で答えていた。

「では、少し早いが出発しよう」

荷物をまとめながら(と言っても、彼はあまり荷物を広げていなかった)、ゴーシュはいつもの調子でそう言った。

「え、あの」

「もうっすか？　ここまで結構歩いたから、もう少し休みたかった

のに……」

「分かっている。四半里ほど進んだら、また小休止をとろう。今は、直ぐにここを離れるのが先決だ」

血の臭いは、獣を呼ぶ。

それが何の血か、どういいう経緯で流れたかは関係ない。血の臭いそのものが肉　つまり食糧を連想させるため、嗅ぎ付けた肉食獣を、それこそ動物も魔物も関係なく片っ端から集めてくるのだ。もちろんこの血の主はそこに転がっている肉塊だが、死にたてとはいえ屍肉（それも肉食魔物）を食べる獣など殆ど　というか、おそらく皆無である。となれば、標的はこの場にいる峻たちになるだろう。

「じゃ、出るなら出るで早くしよーぜ。獣相手に油売るとかやだぞ俺」

言いながら、峻は刃に付いた血を用意していた布切れで拭き取った。続いて干し肉の包みと水筒を頭陀袋に詰めると、鞆に納めた刀ごと背中に担いだ。準備万端というか、今にも出るといわんばかりである。

そこまで準備を整えてしまうと、残されたジャンを必要以上に急かすことになるのだが、本人がそれに気付いているかどうか。案の定、ジャンは「ちよっ……お前、準備速すぎ！」と言いながら慌てて荷をまとめ始めた。

早くしろー、と本当に急かし始めた峻は、ふと左腕に違和感を感じた。そちらを見やると、レナが袖を引っ張っていたらしい。空気

を読まずにわがままを言うような子でもないのに、こんなタイミングでどうしたのだろう。峻が怪訝な顔を見せていると、レナが躊躇いがちに口を開いた。

「……………あのさ」

「おう」

「荷物、持とうか？」

「……………は？」

突拍子もないレナの申し出に、峻は思わず素っ頓狂な声を上げた。その顔は驚いているというよりも、呆れていると表現した方がふさわしい。

当然の話ではあるのだが、レナ自身の荷物は水筒と護身刀くらいで、他の荷物は3人が分担して持っていた。「レナに荷物持たせんの？」と言いだした峻が一番多く持たされていたりするのだが、それはまた別の話。

「ほ、ホラ、朝から歩き通しだし、魔物とも戦ったからみんな疲れてるだろうし……………」

「お前、仮にも護衛対象って自覚ある？」

「わ、分かってるけど……………」

「けどって何だ、けどって。護衛対象に荷物持ちさせるなんて馬鹿な話があるか？」

「だいたいお前王女だろ。王女が荷物持ちとかねーよ。マジねーよ」

お前こそ分かってるのかと言いたくなる台詞だが、悲しいかな的を射ていた。というより、基礎体力は峻のほうが優れているので、ここで心配されるべきはレナのだが、自分を顧みずに他者を気にかけるのは、彼女らしいといえば彼女らしい。

「っーか魔物と戦ったって言うっても、そんなに疲れてねーよ。俺は1頭しか斬ってねーし。」

「お前の盾役のジャンだって2頭は殺してんだぞ。ゴーシユさんに至っっちゃ4頭……」

あれ 何だろう、この違和感。

……もしかして俺、今回あまり役に立ってない？

「……鬱<sup>うづ</sup>だ死のう」

「ど、どうしたの？ やっぱり、疲れてるんじゃない？」

「イヤ……自分の存在意義についてさ、ハハハ……」

峻はがっくりと膝をつき、自らの無力さに打ちのめされた。……とだけ表現すれば哀愁を感じさせることもできなくはないが、レナ

の親切をボロクソに責め立てていた最中、唐突にこの状態になったため、傍から見るとその情動がまったく読めない。いじけたように地面を叩くその姿は、まったく気持ち悪いことこの上ない。

「……準備、出来ただけど」

「む、じゃあ行くか」

「もう立ち直っちゃった!？」

ところが、ジャンの少し申し訳なさそうな（ドン引きともいう）言葉に、峻は何事もなかったかのように立ち上がると、荷物を抱えてさっさと歩き出した。何とか励まそうとしていたレナは完全に置いてけぼりである。

「ほ、本当に大丈夫なの!？ 無理してない!？」

「その言葉、そっくりそのまま返すわ。お前こそ、王都まで保もつんだろーな」

「そういう意味じゃなくて!」

「……リョウさあ、たまにテンションが読めないよな。マジ気持ち悪い」

「何のことだ」

こんなジョークのうちだろ。

と、期待はずれな表情で2人を軽くあしらうと、峻は先ほどから待ちぼうけを食らっていたゴーシュの元へ歩き出した。彼は相変わらずの無表情だったが、もしかしたらストレスが溜まっているかも知れない。……ストレスなんて単語が似合わない男だよな、と峻はすぐに思い直したが。

「 っつ」

そこで峻はふと、先ほどの布切れをまだ手に持っていることに気づいた。その処分に迷い、峻は手の中で弄ぶ。血のついた部分に触れてしまったらしく、掌が少しずつ赤く汚れていった。

(……ポイ捨ては主義じゃねーんだけどな)

放り捨てるのは気がひけるし、かといって持ち歩いていてもデメリットしかない。さて、どうするか……

「 まあいいか」

しばらくの逡巡の後、峻は布切れをくるくると丸めると、魔物たちの死体のほうに放り投げた。これで、少しは足がつきにくくなるだろう。……といっても返り血を浴びているので、大した違いはな

いかもしれない。

「では、行こうか」

「ういす」

一同に続いて出発しようとした峻はふと、改めて死体のほうを振り返った。

この間にも血が抜けたのか、最初に見たときよりも僅かに小さくなっているような気がする。体毛も心なしか寝ており、なんとなく生気を見出せないその姿は、数分前まで生物イクモだったとは到底思えなかった。そうさせたのが自分たちだということも、頭じせいでは理解しているのだが、いまひとつ実感が追いつかない。

否、今回だけではない。

レナと出逢ったとき、山賊たちと渡り合ったときも。

ゴーレムの首を斬りおとした時も。

ボルツ＝トルガレンの者たちを殺したときも。

俺は一度でも、彼らの死を“感じた”ことがあっただろうか？

一度でも、その罪に慄いたことがあっただろうか？

“殺戮”というものを、恐れたことがあっただろうか？

ない。

俺には、何一つ感じられない。

断末魔も、怨嗟も、罪悪感も。

俺は剣を振るい、そして死んだ命がある。

ただそれだけが、俺の中に残る『情報』だった。

命を尊ばないものを、

死を悼まないものを、人は冷血と呼ぶ。

では、感傷すら抱かない俺の血は、もはや凍っているのだろうか。  
それは果たして、生命イノチの正しい在り方だろうか？

気持ち悪い。素直にそう思った。

「リョウ、どうしたの？」

「ん、ああ」

呆然と死体を見やる峻に気付き、レナが声を掛けた。その声にも峻は上の空で、焦点の合わない瞳で中空を見つめていた。

『気持ち悪い』？ この俺が、いまさら？

ふふ、と峻の口元から、忍ぶような笑みがこぼれた。頭から冷水を被せられたかのように興が醒め、散々思い悩んだのが馬鹿々々しくなってくる。

それすら悩んでいる『ふり』のくせに。その程度にしか考えられないくせに。

いまさら、善良な一般人を演じるつもりなのだろうか。

「自分の存在意義について、ちょっとな」

峻はおどけたように笑うと、一同を追って歩き出した。

要するに、俺は化物なのだろう。歩きながら、峻は淡々とそんなことを感じた。

10・(後書き)

3ヶ月オーバーってどういうことやねん……  
どうも、名無しだけど権兵衛です。おひさしぶり。(どの口が言うか)

前期が終わった途端シフトをやたら入れられ、パソコンに向かうこともままならない日々……あまりに疲れて、もう言い訳する気力もありません……

ていうかあの店マジふざけんな。学校サボってシフト入れとかマジふざけんな。単位落としたら就職保障してくれるんか!?

家庭教師を言い訳に休みをもぎ取っていますが、完全に週休2日(笑)状態。誰か俺に休みをくれ。

……いかにいかに、愚痴はさておき。

時間が経つのは速いことで、ここに投稿してもうすぐ1年経つんですよね。

何だかんだでちょいちょい閲覧させていただいて、お気に入り登録までさせていただきました。ビクビクしながら執筆してたあの頃が懐かしい……

文才ないし筆不精だしで、ろくすっぽ進まない駄文ですが、今後とも御贖いいただければ幸いです。皆様の心に残る話を提供できるところを祈りつつ、今後も精進していきたいと思います。

……とか言えねーよやっと10話目投稿で!! (汗)

閑話休題。

執筆継続はまだまだ諦めておりませんが、月1は守れないかもしれないです。  
夜型だし体力ないせいか、ブラウザ開いてもどうにもやる気が起きず……  
少しずつ時間を見つけて書き進めていきたいので、気長に待ってあげてください。

では、次回までしばしお待ちを。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4755o/>

---

神宿ル剣

2011年10月19日04時02分発行